FAQ（狐の問題とその回答集）

ストラップ・大守　瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＱ（狐の問題とその回答集）

【Ｎコード】
Ｎ１１７９Ｚ

【作者名】
ストラップ・大守　瑛

【あらすじ】
思春期の子供にしか見えないサイト
それにより、自殺者が減った。
しかし、失踪が増える。
失踪したものは動物になっていた！
そう、自殺以外にも今から逃げる事が出来るようになった世界。死より重い大きな罪を抱え暮らす動物がいる。

貴方なら、自殺と、動物になる、どちらを選びますか？

彼女もまたそんな罪を、いやもっとひどい罪を背負った。
狐耳が生えた少女とその仲間たちが死や、いじめ、について真面目に考えるお話。

でも、

シリアス苦手な三人なので《語り》と《ボケ》で構成されています。

楽しい中の悲劇になっているはずです。
ＦＡＱ始まります。

見えている悪意（前書き）

これは前編です。

見えている悪意

プロローグ　ワタシの過去語（かこがたり）

ワタシ、ハナミには狐の耳としっぽがある。

ワタシは大きな過ちを二つ犯した。
一つは妹を植物人間にしてしまったこと。
もう一つは「人間」を止めようとしたこと。
自殺をしようとしたわけではない、人間的な心を壊そうとしたわけでもない、ましてや野性的な生活に戻ったわけでもない。

何をしたかって？

それは、ほかの動物、動物界・脊索動物門・脊椎動物亜門・哺乳綱・サル目（霊長目）・真猿亜目・狭鼻下目・ヒト上科・ヒト科・ヒト属・ヒト種以外の動物になろうとした。
物理的に、人間以外の動物になろうとした。
そうウェブサイト「アバウトアニマル」で。
使い方は簡単、項目に従って自分の名前と、なりたい動物の名前を入れるの、そして数秒待つとその動物になる。
ウェブサイト「アバウトアニマル」は青春時代の少年と少女にしか見えない。
少子化を加速させて、行方不明、喪失、を飛躍的に多くした。今や、社会現象に発展している。
警察が対策を立てたり、サイトを消すけど、すぐに別なところで復活したり、もう手が付けられなくなっている。

ワタシは人を止めようとした。そして同時に妹から助けられた。

中三の夏休みの終り。
人を止めて戻りたいと思って戻った。
そのワタシのわがままで妹が倒れ、ワタシは狐の耳としっぽが生えた。
人間は、嫌い、大嫌い。
ワタシが人間を止めたいと思った原因も「人間」そう、特に父と母。
ワタシの父と母は、ワタシと妹以外親族みんなを殺した。
お金で人の心は買えないけど、人はお金に心を奪われる。
あの夏もそう。
夏休み、中三だったワタシと妹は、毎年行っていた里帰りも含めたお盆の墓参りには行かなかった。なので、両親だけが行った。
そこで猟奇的な殺人がおこった。そして、両親は何もなかったように帰ってきた。
次の日、警察が来て両親を逮捕していった。
今思うとあの二人と丸一日、同じ屋根の下にいたと思うとゾッとする。
原因は、遺産相続争いだと、後で警察から聞いた。
マスコミは、遺産相続争いで親族を皆殺しにしたことを大きく取り上げ、ワタシ達姉妹の名前も公表され、今やワタシ達たちを知らない人はいない。
そして、学校ではいじめられ、人を止めたくなった。
特に、妹が罵倒されていたことが、とても気に食わなかった。
両親は犯罪者、学校でのいじめ、人を止めたくなる理由は充分すぎるくらい。
ワタシはアバウトアニマルへ行き。
自分の名前と狐を項目に入れた――　ワタシは人間をその時止めた。

二年後

高校二年のワタシは、放課後になり、しっぽを振りながら部室(ぶしつ)へと向かっていた。と言っても学校では、ばれない様に小さくフリフリ。

ほんと女の子でよかったわ、セーラー服だもの。

しっぽをスカート中に隠せるし、無意識に動いても大丈夫だし。

男子だったら、ブレザーで下はズボンだから、おしり辺りが盛り上がっちゃうし、それに朝とかは前の方が――そんなエッチな女の子じゃいけない。

「それにしても、この帽子、四月だと暑いわね」

狐の耳を隠すためにかぶっている帽子だけど、冬用のニット帽だと蒸れちゃうし。

春用は、先月なくしちゃったし、早く春用の帽子買わないと。

そして、この隠さないといけない狐耳と言っても、遠目から見たり初めて見たりすると猫　耳？　となるのよ、よく見ると狐色だったり、モフモフしていたり。

まあこんな事を考えていたら狐耳に神経が集中される。

「あ、あの二人今日は早いわね」

男子二人の、足音が部室から聞こえてきた。

でも、部室(ぶしつ)はまだ見えない。

無駄に、でっかい校舎だから、たぶん百メートルくらいあるかな。この学校は東京ドーム二個分の広さがあり、グラウンドでは、野球、ソフトボール、サッカー、ハンドボール、ソフトテニス、テニスが同時にできる広さ、校舎はというと、３つの建物で出来ている。北から、特別部室棟、ホームルーム棟、体育兼武道棟となっている。一番南にグラウンドがある。それぞれの棟は、一本の連絡通路でつながっている。なので、空から見ると「王」の字に見えるとか。

っで、なんでその二人の足音が部室付近でなっているのが分かるかというと、狐耳のおかげ。

ちなみに百メートル先の足音だけじゃなく、会話も聞こうと思え

ば聞こえるわ。
だからと言って、あの二人の話を盗み聞きしないわ。
というか、したくない、男の子って下品な話ばっかりするんだもん。
こんな感じで、狐耳のおかげで色々聞ける、ワタシ。
だけど、モスキート音や、犬や猫だけが聞ける音が聞こえるときは、正直きついわ。
歯医者のドリルの音より嫌い、もっといえば、発泡スチロールどうしが擦れる音より、さらに言えば、黒板を爪でひっかいた音のように、ついでに言えば外国人が、そばをすする音が嫌いなように――まあ、だんだん意味が解らなくなったけど。
それは横に置いといて。
まあそんな感じで、耳がいいワタシは、部室（ぶしつ）にいる二人の足音を改めて確認して、今日の部活について頭の中で確認した。

一章　会議中にて

導き部、と聞いてピキーンと何をする部活かわかる人はいるかな、いやいないと思うわ。
なにかの訳みたいになったのは横に置いといて、さらっと説明すると人生相談、人間関係のトラブル、恋の悩み、がある人は導き部へ、人の悩みをズバッと解決、まあこんな感じね。
「で、ゴールデンウィークも終わり、部活にも新人が入り本格的にスタートよ！」
「「で、てなに（スッ）」」
教室の四分の一ぐらいの細長い部室で、目の前で座る部員二人から、突っ込まれたけどここら辺は、いつものネタなので、突っ込み

の後はスルーが鉄則。
「まあ横に置いといて」
黒板を背にしているワタシから見て、右側に長机に突っ伏して、だらしなくブレザーを着ている生物に話しかける。
「ツバキ、去年のワタシ達、どんな活動だったかな？」
「いや、いきなり振られても……ふぁー、まあ面倒だったな」
顔だけ上げ、黒板の前に立っているワタシを、気怠そうに見上げる。
「いつものツバキらしい反応ね」
このあくびをして、面倒くさそうにしているのがフルネームで「総諄（そうしゅん）ツバキ」高校二年で同じクラス、導き部の創設メンバーの一人。と言っても、ワタシと二人……じゃなくって三人で作った。その時は、色々大変だったわ。
「面倒くさかったはないでしょ。でも確かに、慌ただしかったわ。だから、今年は年間の活動予定を立てるわよ」
さすがワタシ。うまい？　尋問誘導成功？
「質問なんでスッけど、いいスッ？」
「いいわよ。十羽里（とばり）くん」
ワタシから見て左側、ツバキと左右対称の位置のお馬鹿そうな子に耳を傾ける。
「去年の活動は、どんな感じだったスッ、ハナミ先輩」
このいかにも、お馬鹿そうな顔で語尾に「スッ」をつける少年は月下十羽里（つきのしたとばり）という平安時代を思わせる名前の後輩。
この子は本当におバカで、ワタシが被っていた帽子がとれて、狐耳の秘密を知ったから導き部に入りなさい、と言ったら入ってくれたの。
でも、あれ逆なんだよね。ワタシの弱みを握ったなら、これを言い触（ふ）らされたくなかったら、とか言って、ワタシを扱（こ）き使うこともできたのに。
ちなみに、これを入部した後、話したら「僕は、僕は」とか言い

ながら、椅子の上で体育座りをして、動かなくなったわ。
現状、十羽里くんはシャーペンで遊びながら聞いている。
「さっきも言ったけど、去年は慌ただしかったけど、楽しかったみたいな感じかな」
と答え、ワタシはカバンからプリントが入ったファイルを取り出す。
「はい」
「「どうも（スッ）」」
二人にプリントを渡す。中身は、去年の活動を月別に分けたもの。
「まず去年の――」
「カツッ」十羽里くんに弄ばれていたペンが落ちてきた。
「すみませんスッ」
「別にいいわよ」
十羽里くんがペン拾ったところで再開。
「説明を続けるわね。まず四月は――」
「カツッ」また落とし拾う。
「導き部の――」
「カツッ」またまた落とす、拾う。
「創設の時期で――」
「カツッ」落とす。
「……チッ」
「今、あの優しいハナミ先輩が舌打ちをしたスッ」
と驚愕の顔をするもの無視。
「絶対、イラッとしてないんだからね。この優しい先輩が、舌打ちなんか、決してしないんだからね」
末尾に、漫画ならキラーンと、星マークが付くように言ったのよ。
けして、黒いオーラなんか、まとっていないんだからね。
十羽里くんが、プルプル震えているのは、気のせいなんだから。
「とにかく十羽里、人の話を聞く時ぐらい顔を上げろ。ふぁー、まああと、そのペン回しを止めろ、うるさい。」

「そんな事を言って、ツバキ先輩、いつも、面倒くさそうに、しているスッ」
「でも、しっかりするべき時には、しっかりしているからテスト学年一位だし、オレ」
ちなみに、ワタシは二位だったり一位だったり、ってツバキ、嘘言っていんじゃないわよ。
あんたが、二位だったりするでしょ。
「マジすか、すごいスッね」
十羽里くんの、あれは憧れの先輩を見つめる眼だ。
「おまえ、宿題はやって来るけど、テスト前に勉強しない奴だろう？」
「はいスッ」
いきいきと答える。
だめだ、ちょっとおバカな子なら、いざっていう時に、凄いことを言ってくれたりするけど、完全なおバカね、この子。
「話を戻すわよ。四月だったわね。創設時期で、色々動き回った時期よ。まあ、今年は部への勧誘だったけど、十羽里くん一人しか入らなかったし……」
バカだし。部員集めに失敗したな。
「ふぁ、で次は五月か、ハナミ、何しただっけ？」
「あんたみたいな、ぐうたらとか、五月病の人のところに訪問ね。でも、五月病の人は面白かったね」
「ああ、そうだったな、だと、今年は去年の実験をもとに治療すると」
「実験ってなんスッか？」
危ないことを言って、活き活きしているワタシ達を見て、十羽里くんが、不審そうに訪ねてくる。
「まあ、水に沈めたりしたわ」
「ほかにも、ほら、滝行（たきぎょう）に、火の上を歩かせたりしたよな」
「なんスッか、その邪気払い修行みたいなのは！」

「坊主にもさせたよね」
「お坊さん！　な……な何を、やっているんスッか」
「かなり泣いていたな」
「たしか、頭に傷があって、次の日に色々あって、クラスになじめたとか」
「かなり端折(はしょ)り過ぎスッ。なんだか、一番重要なところが抜けていたスッ。概要とエピローグしか見ていない小説みたいスッ」
「確かに、そんな読み方、したくはないわね」
　というか、そんな読み方したら、お預け気分になるかな？
「そんなこと言うんだったら、端折らずに、説明してやれよ！」
「えーじゃあ。かくかく云々」
「ああ、アニメとかじゃないから、それじゃ伝わらないだろう！」
「えーえー、面倒だわ」
　中腰になって、ツバキみたいに長机に伏せる。
「はあ、もいい。ハナミが端折(はしょ)ったのは、彼がいじられそして、人と話せて友達ができて、五月病克服というところ」
　あれ、そんなに長くなかったけど、それだけ！
「五月病の定義にもよるけど、新しい環境に馴染めずに自分の部屋(へや)に引きこもっているというのが、五月病なら、あの子は、新しいクラスに馴染めずに自分の部屋(へや)に引きこもったという話ね」
　とワタシが適当に補足しておく。
　あれ、さっきより長いような？
「ふぁ、結果クラスに馴染めて、友達ができれば学校に来るようになり、五月病克服ということだ」
「分かったスッ」
「とにかく五月は、五月病の人が学校に来られるようにしようの月とするね」
　と言い。ワタシは黒板に書いていく。
「具体的にいえば来週から五月病の人とその予備軍の人を集めて対策を立てるわよ」

黒板から目を離し、二人の方を向いて言う。
「ハナミ、でもどうやって人を集めるつもりだ？」
「そこも、ちゃんと考えてあるわよ。蔵ちゃんと、十羽里くんに探してもらうと、考えているわ」
蔵田一心（くらたいっしん）先生、通称蔵（くら）ちゃん。たぶん、女子だけがそう呼んでいるかな。
ワタシ達の顧問で、導き部の創設メンバーの三人の中の一人。
「あとは宣伝かな？」
「ふーん、じゃあ十羽里、よろ」
「俺スッか、でもどうやって見つけ出したらいいスッか？」
「それは、クラスで五月に入ったから急に来なくなった人とか、かな？　でいなかったら、他のクラスにも目を向けて頂戴」
「分かったスッ」
「あと、五月は特にないかな？　さっき渡したプリントにも、それだけしか書かなかったし」
ふと、ツバキが立ち上がり、彼の後ろにあったロッカーから、一冊のノートを取りだした。
「これ、去年の五月分の記録よね。」
「ほい」
ツバキは開けずに渡してきた。しかも机にまた突っ伏す。
自分で見ないの！　まいいか。パラパラと、うーん、やっぱり五月病以外は何にもないわね。
うん、なんか十羽里くんからすごい視線を感じる。
「十羽里くん読みたい？」
「はいスッ」
ツバキはそのやり取りをあくびしながら見ている。
パラパラと、十羽里くんのページをめくる音と、グランドから聞こえる掛け声だけになる。ワタシ的には、かなり危険な事をさせたことも書いたので、ドキドキしながら、言い訳を考えていると。
「これ読んで思ったんですけど、ハナミ先輩とツバキ先輩は恋人な

のでスッか？」
「「……はあ？」」
なんでそう思うの、というより危険な五月病治療に対しての突っ込みは？
「たとえばこの日なんスッけど」
とノートを指しながら言った。
「ああ、耳掃除をしてもらった時ね」
「そうスッ。男女でこういうことをやるのは、恋人か幼馴染ぐらいスッ」
「幼馴染でやるかは、横に置いといて、ワタシはもともとの耳は、自分で掃除できるのよ。でも、狐耳の方は難しくて」
ただの耳じゃなくって、帽子の中の狐の耳を触りながら言う。十羽里くんは納得したようにうなずくけど。
「でも、そのあとに、ツバキ先輩に膝枕して貰って寝た、と同じ様なことが書いてあるスッ。これこそ、動かぬ証拠スッ」
ビシッといい切る。
「あれも気持ち良くって、寝てしまったのよ。狐耳が掃除されるのは普通の耳より気持ちいいのよ。そろそろ掃除して貰おうかな？」
「十羽里先輩にスッか？」
「うん、まあ」
「やっぱり恋人じゃないんでスッか？　それに雨が降った日には一本の傘に……これは相合い傘スッ」
「ツバキが忘れたからね」
「急に雨が降っていな、それに置き傘なんて面倒くさかったし。ついでに言えばこれだけじゃないな」
「濡れネズミにできないし、というかツバキ、濡れると本当にネズミになるのよ」
「なんかのパクリっぽいスッね。でも、初耳スッ。去年、ハナミ先輩が助けたのは聞いたスッけど」
「冗談よ。ちなみに、私が濡れても、何にも変化しないよ。じゃあ、

それは横に置いといて、宣伝について話をしましょう」
「はいスッ」
この子が馬鹿でよかった。
「今週この時間に放送室を占拠するなりして――」
「どこの団長さんスッか！」
「あまり世間一般が知らない突っ込みしないでよ。何？　アニメ？」
「そうスッ。でも、それはやらない方がいいスッ」
「もちろん嘘よ。蔵ちゃんにでもお願いするわ」
「で、どんな内容にするんだ？」
「えっと、始めに、導き部の基本活動を伝えたいの。一年生は、何をする部活か解らないわよね。そのうえで五月病の事を宣伝するわ。その上、先生たちにも効果があると思うわ」
この学校の教員は、何もしない人がほとんど、服装の注意もいじめも相談に乗ってくれない、何もしない。
動くのは蔵ちゃんぐらいよ。だから、導き部を生徒会がすぐに認めてくれたのよね。
「まあ、教師酷いからな、うちの学校」
「そんなにスッか？　結構、進路の事とかは、いろいろ言うスッ」
「いや、それはこの学校の評判のためよ。自分がやることやって、後は何もしない人達よ」
「初耳スッ」
「そのせいで、動物になった先輩とか、かなりいるぞ」
「まあそれは横に置いといて。放送での宣伝は、これでいいと思うから、あともう一つやって見たいことあるの。」
「もしかしてチラシ配りか？」
「違うわよ」
ツバキが、ほっと一息をついているのが見えたけど、何を心配していたのかしら？
「じゃあ、なんだ」
「垂れ幕、インハイの優勝とかの時につける、あれよ。しかも手書

き」
うん、これよ。あの大きなやつで存在感のアピール。
「でも、オレはパス」
とツバキは、体を机に突っ伏し、手だけへらへらと挙げて言う。
「ええ、作るの、本当に楽しいって」
「そうっすよ」
「設置も、文字書きも、しないから。ふぁー、眠い」
「十羽里くんも賛成してくれたのに、仕方がないあれをしましょう」
ワタシは帽子を取って、ツバキの前で机の下からちょこんと顔だけ出して、ツバキを見つめる。
「お・ね・が・い、手伝って」
狐耳をぴくぴくさせる。
「お……いい、手伝う」
明らかに頬を赤くさせていた。
これが、かわいいというのは私も知っているし、やっぱりツバキには、この作戦が一番ね。
時と場所によるけど。
「かわいいいいいスッ！」
手をパタパタ、上下させて喜んでいる。
十羽里くんも、落ちたね、ニヒニヒ。
「そろそろ、この話は横に置いておいて、次、六月の話に行くわよ」
だとワタシしか残らないわね。
「戻ってきてー二人とも」
「……」
反応なし。困ったわね。
「まあいいわ、話を続けるわよ」
「そ、そのまえに帽子をかぶれ」
なるほど、そういうことね。ちゃちゃっとかぶりましょうか。うんしょ、うんしょ。
「はい、かぶったわ」

けろっと、十羽里くんは戻り、ツバキは頬を赤くしたまま、前を向いてくれた。
「で、六月って憂鬱よね。気の晴れない気持ちを、人にぶつけてくる月だと思うのよ。一年生も、それなりに友達のことに詳しくなってくると思うのよ」
「なるほどすっ」
「で、いじめのスタートが切られると思うのよ」
「六月はいじめ僕滅の月か？」
ツバキの顔がもとの色に戻っていたのは残念かな。と思いながら彼を見る。
「そうよ。去年みたいに、集団動物化なんて、やらせないんだから」
「集団動物化スッか？」
「去年あったのよ、六月の終りに……」
そう本当にもういやだ、あの月は。半狂乱にもなりかけたし。六月は本当に嫌い、ただでさえ休日が少ないのに。今のは冗談だけど。
「十羽里、それ以上は追及しないでくれ、オレもハナミも狂うから。そうだ、去年の記録が後ろのロッカーにあるから、それで後で見てくれ」
「はいスッ……」
いくら、バカな子でもただならぬ空気を感じたみたいね。触らぬ神には祟りなし、触れてほしくないわね。
「でも、ひとつ聞きたいスッ。動物化は、やっぱりアバウトアニマルスッか？」
「そうよ」
答えられると思っていたのに、そう大丈夫、大丈夫だから、ワタシそんなに震えないで。
「集団だったのは、学校裏サイトのひどい書き込みで苦しんだ被害者が、集まってね」
「ハナミ無理するな」
「大丈夫、まだ余裕があるから」

でも、手には汗を大量にかいていた。
逃げない、受け止めすぎない。だから逃げ出さない。
「すみませんスッ。やっぱり、あとで読むスッ。でも、アバウトアニマルはやばいスッ。ハナミ先輩は恨んでないスッか？」
「ワタシが、利用したから。ワタシがそれをいいように使ったのよ。アバウトアニマルを恨むなんて、おかしいじゃない。恨んだら筋違いも甚だしいわ」
「そ、そうすか」
「……」
このツバキの沈黙が、一概にその場の空気を言い表していた。
「でも、これって当たり前のことだと思うの、自分が好きでこんな体に、なっていないみたいな人だったら分かるわ。でも、アバウトアニマルはちがうの、自分で名前やなりたい動物の名前を入れないとならないの。自己責任、お酒の飲みすぎでアルコール中毒になったり、大麻や麻薬を吸って薬物中毒にたばこの吸いすぎで肺がんになったり、これらって、自分から率先してやらない限りならない。だから、一人で傷つき、救いを周囲に求めるなんて、おかしいと思うの。ワタシはアバウトアニマルを恨んではいけない」
ワタシはそう言い切る。
確かに恨みはある。妹が巻き込まれたことや、人の気持ちを弄ん(もてあそ)でいるところ。
「あとね、少し感謝もしているの。だってワタシがこの立場にいれるのも、あのサイトのおかげなのよ」
「そうなんですか」
ただ、別に悟ったから、こんなことを言っているわけではないけど。
それは、横に置いといて、
「とにかく、六月はいじめをなくすわよ。雨が降っていても、心晴れやかキャンペーンみたいなことするわ」
「おお」

「他には……」
とワタシが言葉に詰まっていると。
去年の記録、と言いながらツバキが立ち上がり、後ろにある記録を再び出そうとするのをブレザーの襟をワタシは急いで掴んで阻止。
だってまた「恋人ですか？」と再び十羽里くんから言葉攻めにあうもの。
「ねー、メールチェックしてないわね。しようね。」
「そうスッね」
「ツバキ、チェックお願い」
「はい、はい」
ツバキは、けだるそうに答え、戸棚の右隣、ドアとは反対の方にあるパソコン前に行き、電源をつける。
「そういえば、ポストの方はどうなったスッ？」
ポストと言っても、生徒会が設置する意見箱みたいなもので、それは部屋の前にある。
「空だよ。っすからかん。今年度になってから、一回も来ていないわ」
「こっちもなしだ」
とパソコンの前に座っている、十羽里が言う。
「人生相談、人間間（にんげんかん）のトラブル。恋愛相談全部ゼロ」
「そう……」
「でも、一回も恋愛相談なんて来なかったな」
恋愛――とつぶやき考える十羽里くん。
今だけの、禁止ワードを言わないで！
「女子か男子に、告白をしたいから手伝ってほしい、というのもなかったな」
「彼女彼氏に告白……なんか思い出しそうスッ」
回避が……。
逆効果に働くなんて。ツバキに睨みをきかしてから。
「それは、横に置いといて、ほら応援の話だったでしょ」

「そうスッ」
話を右に左に揺さ振れば。
「……」
間が持たない、と言うか、さっきのやり取りの中で、その後の言葉を考えておくべきだったわ。
「どうしたんスッか。そんなにきょろきょろして」
「ヒントを求めて」
「？」
とにかく、こっちは必死なの。きょろきょろしている間に、グラウンドに目が止まる。
「何かすごいオーラを感じるスッ。熱血、死ぬ気オーラ全開スッ。熱血スポコン系スッ」
「危ない目になって、グランドを見ている人に、使う表現じゃないな」
ツバキも突っ込みなんてしてないで、次の言葉を考えなさい。
と、ここで二人だけの部活を発見。
「あ！」
「どうしたんスッか急に」
「よくぞ聞いてくれた、ワトソン君」
「また同じ突っ込みを、していいスッか？」
「まあまあ、冗談は横に置いといて、思いついたの」
「なにをだ。ふぁー」
「それは応援団も来ないような、少数人数の応援に行こうと思うの」
「パスその二」
「いいスッね」
「十羽里くんも、こういっている、ことだし」
「またかよ！」
「ということで、応援に行くわよ！　部活の汗臭い青春が、ワタシの応援で、少しは色付くんじゃない」
「かなりの自負だ」

「なんか言った？」
「いいえ何にも」
ツバキが何か、嫌な汗をかいているように見えるけど、まあいいや。
「甘酸っぱい青春にはなるスッね。甘酸っぱい……」
と、急に十羽里くんが考え込む。
この子が考え事をするとき、ずっと同じキーワードを言っているかのように口元を動かすのよね。ちょっと変わっている子。
まあ変わっているというか、一番おかしいのはワタシで一番真人間なのは十羽里くんなんだよね。
「思い出したスッ。十羽里先輩とハナミ先輩は恋人同士、彼氏彼女の関係スッよね？」
だめだった。
頭をたたけば、記憶が飛んでくれるかな？　でも、ワタシが思いっ切り叩いたら記憶だけじゃなくって体も飛んでいくわね。
そんな思考の結果、記憶をたたき飛ばすのは諦めて。
「別にどっちでもいいんじゃないかな？」
「だめスッ」
「じゃあ、なにワタシを狙っているの？」
わざとらしく、ワタシは自分の肩を抱いた。
「そういうわけじゃないスッ。ただ気を使わないといけないか、判断したいスッ」
「どっちでも気を使わなくっていいからね。空気を読まなくっていいからね」
「でも、でも」
頭がぐるぐるする思考なのに、あきらめて認めているようで、どっちか解らない風の、受け答えだけどダメね。
「とにかく、どっちでもいいじゃない」
「じゃあツバキ先輩教えてスッ」
そっちにいっちゃった。

「どっちでもいいんじゃね」
ほっと一息これで諦めて――
「ひどいスッ、俺だけ仲間外れスッか！　もういいスッ。ここの記録で、全力で調べられるスッ」
と本棚に手を掛けたとき。
「トントン」
ドアが揺れ十羽里くんは手を放す。ちなみにワタシ達導き部蔵ちゃんを含めて、この部屋に入るときはノックしない。なので……、
「ふぁー、入ってもいいぞ」
ツバキのけだるそうな声の後と、ドアが謙虚に開く。
「あの、失礼します」
入ってきたのはやつれた顔の男の子。
「あの、僕を助けてください！」
さあ、今までの会議は横に置いといて、そろそろ導き部の本題に取り掛かりましょうか。

第二章、被害者にて

一章の始めで言ったけれど、導き部は、基本的に人間間の何かをいい状況にするために、話を聞いてアドバイスしたり、カウンセラー兼請負人みたいなことをしたりする。
だけど、この学校の生徒からは悲しいことに。何でも屋みたいな認識だったりする。
で今回は前者みたいね。
「じゃあ学年と名前を言ってね」
「はい、僕は一年九組の星守（ほしゅもる）です」
今、ワタシ達が黒板側、で今自己紹介してくれた守君が、本棚側に座っている。
守君は、あまり顔を上げずに下を向いて話す。人の顔を見てしゃべれないタイプらしい。

それとも依頼内容が人にあまり言いたくないものかな。
「ここに来た理由は？」
「え……ほかの人には言いませんよね？」
守君は顔を上げワタシ達三人の顔を見ていく
「もちろん、でも、顧問には話すけど、この話はここでしかしないことを約束するよ。それにこの部屋防音完備、声は外に漏れにくいわよ。まあ、ワタシには関係ないけど」
「？」
守君は、何を言っているんでしょうか？　という感じで首を傾げる。
「いや、こっちの話だから気にしないで、で依頼内容は？　ここに来たとき、僕を助けてくださいって言っていたけど」
さっきまで顔を上げていた守君はまた俯く。
「はい、僕いじめられているのです」
「ふ～～ん、それで」
あまり、深いことを言わせないようにするために、こんな態度を取っている。
何をしてほしいのか、状況とかはどうなのか。
それを一個ずつ絞るため。
「――助けてほしいと思ってきました」
「で、どんな感じでいじめられているの？」
「僕自身、よくわけの分からない理由で、殴られ、蹴られ……」
「言葉の暴力じゃないのね！」
てっきり高校生だから、証拠が残りにくい方法を取ると思っていたけど。
「はい、それに僕を殴る人は集団で、今まで知らなかったです。中学校も別ですし」
急な暴力、理由はわからない。
それに集団ね。
ワタシの場合、理由は……ワタシの親だった。

「どんなことを言われて、暴力を振るわれているの？」
「邪魔だ！　退け！　気持ち悪いんだよ！」
と同時に立ち上がった守君。
「急にどうしたんだ」
びっくりして、声が出なかった私の代わりにツバキが聞いてくれた。
「あっ、すみません。イライラしてしまって」
守君は心を落ち着けるように、自分の胸に手を軽く当ててから座った。
「いいって、ふあぁぁ～。で邪魔だとか言われて、暴力を振るわれているのか……」
やっぱり理由がビミョーね。しかも集団。
「なんか、おかしいスッね」
さすがに、十羽里くんでも気づくか。
「はい、僕もそこに違和感を覚えます」
自信たっぷりに言う、この時の守君は、いじめられている人には思えなかった。
「意外と冷静なのね」
「思ったことは、はっきりという方なので、いえ違います。思ったことしかはっきり言えません」
「そう……このことはワタシ達以外にも相談した？」
あまり人には聞かれたくないみたいだし。
「いえ、導き部の皆さんが初めてです。それに、誰かにこのことを喋ったら、社会的に殺すとか」
「だから、精神攻撃をしてこないのね」
「ただ、日に日に暴力が殺傷の域に達しているのです」
パッと見て、顔や見える所には傷が付いて、いないみたいだけど
「ちょっと、上だけでいいから、服を脱いでくれるかな」
頬を赤くし、守君は制服の上を脱いでいく。
ちなみにこの部屋の窓は全部マジックミラーになっている。

「やっぱり、肝臓のところに大きな痣と、右肋骨（ろっこつ）の横っちょに打撲ね」
「見えていたスッか！」
ワタシは十羽里くんの方を向きうなずく。
これこそ、横に置いといていい話だけど、ちょっと例え話。
ある国で、大地震が起きました。多くの人が死んだそうです。
でも野生動物保護区には、災害で死んだと思われる死体がなかったそうです。
で、動物には地震を予知できる、とかは皆が知っていると思うの。
これは、動物が持つ警告能力が、そうさせたとか諸説色々あるわ。
これで、何を言いたいかというと、ワタシはその危険というものが見える。
予知的にも使えるし、今みたいに傷の位置もわかる。
でも大体だけどね。これも、狐になってからの能力。
さっき言ったように横に置いといて。
「かなり痛いでしょ」
「はい、肝臓は特に歩くだけでも」
守君は、苦痛に歪めた顔でお腹の横を擦りながら言った。
「見た感じ、一回、医者に行った方がいいな」
こういう痛みをよく知っているツバキが言っているんだから、危ないかもしれないのね。
「そうね、ツバキ。あとパソコンでちょっと調べて」
「はい、はい、例の名前検索だな」
と言うと、ツバキはパソコンの前に座り、作業をはじめた。
「僕は、どうしたらいいんでしょうか……。逃げても次の日つかまって……。それに命の危険を感じます」
守君は、肩を震わせながら言った。その声は、とても細く弱々しかった。
「ほんと、学校の教師が動いてくれればいいのに……」
本音の愚痴。誰にも聞こえてないと思うけど。

「出てきたぞ」
ワタシ達はツバキが操作しているパソコンを覗くように立つ。
「これ、なんスッか？」
パソコンには、この学校のサイトが映し出されていた。でも、なんかおかしい？
「これは学校の裏サイトだ」
「それが僕とどう関係があるんですか？」
ツバキがパソコンを操作して、ある文章が表示された。それは、守君の誹謗中傷。
守君は、その場に崩れ落ちる。
ワタシもつい叫んでしまう。
「はあぁぁ！　去年つぶしたはずなのに、十羽里これは前のとは違うの？」
「作成者が違うな。前のサイトを再現したサイトだな」
さらに操作をしていくツバキ。表示されたのは、パンツ姿の守君の写真。
補足説明には「約束を破ったバカ」と書いてある。
「でも、守の書き込みは今日の日付のものスッね」
「鋭いわね。たぶん、この部室（ぶしつ）に入ってくるところを、見られていたのね」
「でも内容はばれないスッ」
「そんなの関係ないわよ。きっかけさえあれば、理由なんかいいの。ただそれだけで始まるのよ。そうただそれだけ」
少し嫌なことを思い出すな。
「ぼ、僕が入ろうとしたとき、誰もいなかったのに」
地に伏せたまま、守君が呟く。
「仕方がないわよ」
背中を擦りながら言った。その時の守君から、とても弱い部分が出ていた。
「一様これホームページレンタルサービスで作られていたサイトだ

から、レンタルもとに閉鎖申請をしておくからな。数十分前の書き込みだから、そんなに多くの奴が見てはないはずだ」
「ありがとうございます」
守君は顔の色が少し戻っていた。
ワタシは、立ち上がった守くんの方を向き、
「でも、その場しのぎにしか、なっていないの。だから、作成者を捕まえるまで、いくら潰しても駄目ね」
守君は、肩を落とした。
「でも、よくこんなサイトが、警察から見つからないもんスッね」
「アバウトアニマルが出てから、警察もこういうサイトがないか一斉捜査をすることが有るの。だけどこうパッと見、本当の学校のサイトと見分けがつかなかったら、警察でも見つけるのが難しいんだって」
「そうスッか」
十羽里くんはパソコンの画面を再び見つめる。
その行為は、澄んだきつね色をしたビー玉の様な瞳を、濁った焦げ茶色に、していくように見えた。
十羽里くんがこの部に入ってからの初めての依頼だった。
そして、いきなり人間の嫌なところをまざまざと見せつけられて、しかもいじめとしては一番たちの悪い方。
でもね、十羽里くんには悪いけど、守君にこれだけは言わないといけないの。
ワタシは守君の両肩を掴み、目を見た。
「あのね、守君これから精神的ないじめ、今みたいのが増えてくるわ。本当に辛くなったらワタシ達導き部を頼って、暴力を振るわれたら、導き部に逃げ込んできていいから。守君を守るだけの能力はあるから」
ワタシはツバキの背中に目を向けた。
「あ、ありがとうございます」
泣きながら肩を震わせた守君はもともと小柄だったのがさらに小

さく、少年のように見える。これは絶対に言わないといけない。
だって、アバウトアニマルに行ってしまうから。
「十羽里くん、守君にお茶願い。あと守君は座って」
守君を座らせた後、ワタシもさっきまで座っていた椅子に座る。
ツバキは、閉鎖審査の作業を続けていた。
ポットから、お湯が注がれる単調な音が、部屋を包み落ち着かせる。
お茶は、女子が入れたほうが男子は喜ぶけど、十羽里が入ってからは、いつも入れてもらっている。
「守君、実は十羽里くん、茶道初段を持っているのよ」
「はあ」
ちょっと間抜けな口の空け方をしたけど。
「嘘よ」
「なんで嘘をついたんですか？」
疑いの目をされたので、慌てて訂正。
「あの、冗談と言うか、まあそのぐらい、おいしいお茶が入れられるのよ」
「はい、その噂のおいしいと評判のお茶スッ！」
そっと守君も前に置く、そのちょうどいいお茶は濁り、色は薄すぎもしない十羽里くんの心が表れていた。
「ハナミ先輩もどうぞスッ」
「ありがとう」
手渡しでもらったけど、アツアツだと飲めないのよ。ということで、ワタシは口をつけず、湯呑を机に置いた。
「ちょっと温(ぬる)めスッ。直ぐにも飲めるスッ」
「おっ、やるわね。ワタシが猫舌のことを言ってないのに」
「前、アツアツで出して、ハナミ先輩時間をかけて飲んでいたスッ。だからスッ」
本当にこの子はお馬鹿なのかしら？　と思うわ。
案外ＩＱは低くっても、ＥＱ（心の知能指数）が高いのかもしれ

ないわね。
　それは横に置いといて、ワタシはお茶を一口飲む。それを見てか、守君もお茶を飲み。
「落ち着いた？」
「はい。このお茶はとってもおいしいです。ハナミさん、僕はもっと頼っていいんですよね」
　そうよ。と言いもう一口お茶を飲む。心が洗われる味がした。
「僕は、これから何をしたらいいのでしょうか？　まったく分りません」
　そんな顔しちゃだめ、苦すぎるお茶を前触れもなく飲まされたみたいな、そんな顔。
「じゃあ、少し雑談をしましょう。というよりも、アンケートかな」
「アンケートですか？」
「そうよ。この部活は何をするために、ある部活なのか、みんなの認識を知りたいからね」
　これは本音。
「じゃあ、守君始めるわよ。質問一、この導き部は何をしている部活ですか」
「カウンセラーみたいな、ですよね？」
「そうね。他には？」
「ええと、これを言ってしまうと、失礼なんですけど……」
　もともと伏せがちの顔を、さらに伏せて言う。
「……雑用係とか」
　やっぱり。
「よく割れた窓ガラスや壊れた椅子や机の片付けをしている部活だと聞きました」
「あ～なるほどね」
「それは、俺が関わったトラブルによる破損品の片付けだ。十羽里あとオレにもお茶」
　ツバキがパソコンの操作を終わし、ワタシの右に座る。

「はい、お茶スッ」
十羽里くんが、上が青で下が灰色の湯呑がツバキに前に置くちなみに三人の中で一番アツアツ、それを一気飲みする。普通はできないな。ワタシは絶対やりたくない！
「俺らが壊したんだから、片付けはする。一番ぶっ壊した時は何時だっけ？」
「十月の文化祭ね」・
「僕もそれを聞きました」
「あ……あの宣戦布告野郎か。文化祭をでたらめにしてやるとか言って——何、壊したっけ？」
「あれスッね。噂レベルで、聞いているスッ。ステージの装飾が全部ボロボロになったとかスッ」
「あ〜〜そういえばそうだったな。でも喧嘩を吹っ掛けられた時、一番金が掛かっているんじゃなかったか？」
「どうだったかしら？」
ワタシは立ち上がり活動記録があるロッカーから会計ノートを取り出し、
「えーと、そうだね。空き教室だけに無駄に色々あったからね」
「いくら掛かったスッか」
好奇心旺盛な声で聴いてくる。
ワタシはもう一度ノートに目を落とし机に開いた状態で置いた。
一様ここなんだけど、と真ん中あたりを指す。
「五十万円！」
身を乗り出した守君が叫び、十羽里くんは目を丸くしていた。
「机の破損四十個、椅子三十九個、窓ガラス六枚、ドア四枚床の破損に、と教台の破損黒板、結構壊したな俺。」
なんで得意げに語っているのよ。いや、でも。
「まあ、これ全部部費なのよね」
そう考えると、なんだか自慢したくなるお値段ね。
「全部部費スッか！」

「自分で言っておきながら目、白黒させないでよ」
でも仕方がないかしら。
「ちなみにこれ全部生徒会長のコネね、えっへん」
「ハナミ、ペッタンコの胸を張っても、盛り上がりはしないぞ」
「ひどいい！」
ワタシはポカポカとツバキの胸を叩く。
「いた、いだ。お前、猫パンチみたいに軽くやっているつもりだろうが、かなり痛いぞ！」
「あっごめん」
ワタシの目には、ツバキの体が痛みや傷の赤がうっすらと見えた。
でも、あんなことを言った、ツバキが悪いんだからね！
「まあ別にいい、俺も悪いんだ、部費の話に戻そうぜ」
「そう思うなら、その前に謝ってよ……」
さっきまで怒っていたのに、次第に言葉が弱々しくなった。ツバキは立ち上がり。
「ごめん。でもハナミにはもっと魅力的な部分があるからさ」
そこまで言って、ワタシの頭を帽子の上からに撫でる。ワタシは、体重を預けるようにツバキに正面から寄りかかった。
「あの、ラブコメ劇場ありがとうスッ。俺と守がいるのを忘れないでほしいスッ。そろそろ部費の話に戻すスッ」
その声とともに、ワタシはツバキから離れた。
十羽里くんがげんなりしている様なので話を戻しましょう。
「そうね、ん？　でも部費の話の前に、なんか守君に聞いていたような気がするんだけど？」
「アンケートのことじゃないでしょうか？」
と謙虚に言う守君。
「そうだったわね。でも特に聞くことは無いかな？　ツバキも十羽里くんも特にない？」
「じゃあ、俺から一つ質問、この部は学校に絶対必要か？」
それは、いつものけだるそうな声とは違う、はっきりと真っ直ぐ

で、本気の声だった。
「はい、僕はこの部が必要だと思います。この学校の教師は勉強のことだけですし、担任もホームルームで連絡するだけで相談とかできる感じではありません。それにカウンセラーなどは一切いませんし」
ツバキの言葉が伝わったんだろう、しっかりと答えてくれたけど、守君はそこまで言うと俯いた。
「ここは心の砦だと思います」
その声は今までの苦悩が伝わってくる感じがした。
「ありがと。そう言ってくれると本当にうれしいな。俺らが心の砦かその肩書に負けないようにしないとな」
「うん」
「はいスッ」
「だから、さっきから言っているように、俺らを頼っていいから。まあふぁーこんなものふぁーか」
いい言葉だったのに最後がもったいないよ。一回、真面目モードを使うと、さらにだらけ始めるから仕方がないかなと思い、ツバキを見る。いつも以上にだらけている、そのツバキがそれは面白い。
「あ～疲れたーやべー死にてー原稿間に合わね～」
「締切まじかの作家スッか！」
十羽里くんがそんな突っ込みを入れている間に、ツバキが椅子を引いて、座ったまま片足ずつ頭の上にあげて、首の後ろで足を組む。ヨガのポーズみたいなのをしている。
「ぷははは」
と顔を上げた守君が笑った。
「やっと笑ったな」
「そうね。ぷっあはは」
さすがに、そのポーズのまま真面目な声で言われても。それにゲラゲラと十羽里くんも笑っているし。
「ここに、来てからずっと暗かったからね、守くん」

「ちょっとは、密度が上がったか」
「はい。皆さんといると楽しいです」
四人が笑っていると。
「おーいそこの四人いつまで笑っているつもりだ」
と急にドアが開き、導き部の最後のメンバーが入ってきた。
「アハハ、あっ、蔵ちゃん」
「その呼び方は止めてほしいのだがまあいい、……あ～」
あきらめの言葉と共に蔵ちゃんは守君の方に視線を移す。
「あっ、依頼人の守くんです」
「何の依頼だ？」
さっきまでの空気は冷め、それを感じ取ったのか、蔵ちゃんも表情が険しくなる。
「いじめに関する依頼です」
空気は冷めただけでなく、重くなって、心なしか部屋全体が暗くなったような気がする。
「そうか、どんな感じなんだ！」
蔵ちゃんは暗くなるというより、怒っている感じ。いつもこうなの、もっと落ち着いてほしいわ。
ワタシが説明しようと口を開いたとき、守君が勢いよく立ち上がった。
「僕が、説明します。自分のことだから」
その立ち姿は何の迷いもなかった。

「――という感じです」
「そうか、簡単にまとめるとわけの解らない文句を言いながら、殴ったり蹴ったりする、変な集団に目をつけられたと、そんなところだな」
守君は立ったまま頷く。
ここで、蔵ちゃんはさっき十羽里くんが入れてくれたお茶をすす

り、言葉を続ける。
「犯人の名前は！　何年何組だ！」
叫び声と言っても過言ではない声、って落ち着くために、落ち着くためにお茶飲んだんじゃないの！
そんな心の中の突っ込みなど気が付かず、蔵ちゃんは、守君の肩を掴み激しく揺さ振る。
「ハナミ、あれを止めなくってもいいのか？　十羽里は十羽里で心配そうに見ているし」
急に、ツバキがワタシの耳元で囁く。こんな状況なのに、囁かれる言葉一つ一つにドキッとした。
「そそそ、そうだね」
動揺を隠しきれない。
「どうしたハナミ、もしかしてあの時のことをまだ引きずっているのか？」
「いや違うけど……」
ワタシは、ドキドキしているの、察しなさいよ、と意味を込めて視線を送った。
「ならいいか、とにかく止めるファ～、か」
ぶっきらぼうに答えてもう！
「鈍感」
「何か言ったか」
「いやべつに！　さっさと止めましょうか！」
「なんでそんなに怒っているんだ！」
鈍感な彼を無視して、一人で止めますか。
「蔵ちゃん、ストップ。守君、目を回していますよ」
ワタシは蔵ちゃんの手首を掴み止める。
「すまなかった、ついかっとなってやってしまった。殺るつもりはなかったんだ！」
「犯罪者の自白か！　て、なんで突っ込んでいるんだ！　オレ！」
「はいはい、蔵ちゃんは落ち着きましょうね。ツバキは放っておけ

ばなんとでもなるので、蔵ちゃんは落ち着きましょう。吸って―吐いてー」
「コースコー、コースコー」
「ダースベイダーかよ」
とっさにツバキが突込みを入れていた。
「はあ～すまん。お前らより二回りくらい違うのに、かっとなって大人気なかったな」
心から、反省しているように、見えるのはいつものこと。
「こういうタイプの依頼の時は、何時も熱くなっていますよ。気をつけてください。ワタシとツバキは慣れていますが、依頼人や、導き部に入ったばかりの十羽里くんが、びっくりするじゃないですか！」
「母から怒られた子供の様にしゅんとなる蔵ちゃん」
「ツバキ、変なモノローグを入れないで。それに誰が母よ」
「はは、すまんすまん。ついな」
「はあ～、こんなことはもうしません」
たしかに、子供みたいにしゅんとなっているわね。
蔵ちゃんは、四十歳子持ちの体育教師。たしか蔵ちゃんの子供は、確かワタシより二歳下、今中三双子の娘がいるとか、そして導き部の顧問。
「本当にすまなかった守君。では改めて聞こう。お前を、いじめるやつの名前は？」
守君は顔を伏せて、吐き出すようにつぶやく。
「リーダーらしき人しか解らないですが、多田と呼ばれていました」
「ああ、七組のアイツか、ああもう我慢できん、多田を今すぐ打っ飛ばしに行ってくる」
「十羽里くん蔵ちゃんを止めて！」
ドアの近くにいた十羽里くんが立ち塞がる。
「この先には行かせませんスッ！」
バトル漫画で、復習に行こうとする仲間を、止めるように言う。

というか、ほとんどそのまま。
「どけ！」
ドスドスと、蔵ちゃんはドアに近づき十羽里くんを片手で持ち上げどかした。
正確に言えばぽいっと軽々と投げ捨てていた。蔵ちゃんのがたいのいい体つきから予想が付く行動だった。
「蔵田先生ストップ！」
「もうなんでそうなるの！」
ワタシとツバキで止めに入る。それから止めるのに一時間ぐらいかかった。

それは横に置いといて。
その後、守君には帰ってもらい、今は対策会議を始めるところ。
定置、まあツバキと十羽里くんは黒板の方を向いて、椅子に座り、蔵ちゃんは、ドアの近くに立ち、ワタシは黒板の前に立つ。
「対策を立てる前に、聞いておくが、ハナミ、お前はこの依頼を受けるか？　降りてもいいんだぞ」
夕日の独特のオレンジ色、ワタシはこの色を狐色と呼んでいる。その狐色の日が差し込む部屋（ぶしつ）。こういう依頼は、昔のことを思い出す。
それを知っている蔵ちゃんは、心配していつも声をかけてくれる。
「大丈夫です少しは耐性がついているので、それより」
とワタシは夕日でより瞳が栗色に見える子に目を向けた。
「十羽里くんは、いいこのまま続けて」
本当はもう少し低いランクから始めるつもりだったのに。
「はい、覚悟の上で入部したスッ」
決意を新たにした十羽里くんは、少し明るかった。
「ハナミ、オレはこれに関して、どこが悪いのか、よく分からないんだが？」
だらしなく、長机に伏せながら椅子に座っているツバキが、その

まま首をかしげる？
「ツバキ、今までのいじめ系は真犯人と実行犯が一緒だったけど、今回は違うの」
「もしかして、あの意味の解らない理由とか、守がいじめている奴のことをよく知らない、だから実行犯、真犯人と別々だと。クラスも違ったよな！」
　ツバキがバッと体を起こす。
「その可能性は高いわ。前会ったのは、叩いたりする人も直接的にその人を嫌っていたし、同じクラスで慢性的にいじめていた。ネットでのひどい書き込みとか、グループでいじめていたやつ。覚えているよね」
「あ、覚えている。喧嘩を吹っ掛けられたとき暴走に走ったな」
　次第に、ツバキが陰に沈んでいくように見えた。
　ただ、日が沈んでいるだけかもしれない。
　あの時のツバキは悪魔、いや、魔王やハデスよりもひどく怖い。
阿修羅、そんなのも凌駕するほどの危なかった。
「その時はリーダーがそのクラスにいて、その人のことは、はっきり嫌っていていたわ、だから分かりやすし解決も簡単だった。だけど、どうも守君の場合はリーダー＝（イコール）実行犯にはならないみたいなの」
「面倒くさそうスッね」
「じゃあ、暴力を振るっている奴らを、ぶん殴っても意味がねえわけだな」
　残念そうに、ツバキは頭を落とした。その姿からは、さっきみたいな暗さが抜けていた。
「そうね。力技では、どうにもならないみたいね。あと、守君は一人でここまで来たと言っていたけれど、ワタシの狐耳には二人分の足音が聞こえたの」
「だと、守は誰かに、つけられていたということだな」
　今まで黙っていた蔵ちゃんが怒りを表にして言う。

「そうかもしれませんね。だと、裏サイトでの、守君の誹謗中傷が今日から始まったのも納得できますね」
残りの三人が頷く。
「明日も来てもらって、そこら辺を聞きましょう。あと、おかしなところ有ったかしら？」
「特にないな、だけど、ハナミ、前みたいに観察もといい監視をするのか？」
どちらもひどいよ！
「そうしたいけど、ワタシもツバキも二年だし、ここは、十羽里くんにお願いしようかしら？」
「俺スッか！　でも、どうしたらいいのか、分からないスッ」
不安なのか、十羽里くんの声が震えていた。
「確かに大切な役割だけど、見える範囲でいいから。それに、昼休みとか、ホームルーム始まるまでは、私とツバキもつくから大丈夫」
「そうスッか」
「じゃあ明日六時五十分にここ集合。登校から守君を追ってみるわよ」
「ええースッ」
「ハナミ、知っていると思うが、俺は朝弱いぞ、だからパス、ファー」
「モーニングコールするわよ」
「それでも」
「とにかく六時五十分、集合」
今の落胆したツバキの顔もいいわね。明日を楽しみにしなさい、早朝集合だからって、逃がさないんだから。
「じゃあこれで、今日の会議終了！」
「いいんでスッか。これで」
「そうよ。この話は、今日はこれでおしまい。ワタシが終了を宣言したら、この話は、ここでも話さない。もちろん、外でも話しちゃだめよ」

こくりと一回だけ頷いた。
もう、喋らない様にする為みたいにも見える。
「それじゃあ先に帰る。戸締りとか、しっかりしろな」
「さようなら（スッ）」
蔵ちゃんは、手をグーパーさせながら部室（ぶしつ）を去った。
その後ワタシ達も、部室を出て、たわいもない話をしながら下校した。

たわいもない話は、人間を維持するために重要なのよ。

章間壱　妹の話

ワタシは、たった一人身内と呼べるのが妹だけ。
愛おしくて、守ってやりたくなる、可愛いい妹がいる。
小さいころから、双子と間違われるぐらいの、仲良しでよく似ていた。
どこに行っても一緒、遠出での時も同じバックで、ファミレスで頼むデザートも一緒。
本物の双子以上に双子らしかった。
それに、ワタシが四月二日に生まれ、妹が三月に生まれたために、同じ学年。
だからもっと双子だと勘違いする人が増えていった。
それで、小学校の頃友達がワタシの誕生日の時に、誕生日プレゼントを妹の分も用意をする、そんな手違いがあった。
その逆もあった。
何も考えずに、ただただ楽しかった、無邪気で一番良かった時期。
中学生になって、ワタシと妹は、違う部活に入り、それぞれ思い思いに過ごした。
さすがに、中学にもなると、身長や顔に違いが表れて、双子に間

違う人は減った、ちなみに妹は、童顔でかわいい系の顔になった。
身長は一四三センチと小さく、妹らしさ？　に拍車がかかっていた。
アバウトアニマルのことを教えてくれたのは、その妹だった。
今考えると、なんで妹が、そのサイトを知っていたのかも、不思議。
ワタシも、そこそこの、情報通だったから、妹に情報を与えることの方が多かった。
なんで知っていたのだろう、いつも明るく、元気があって、人を疑うこともなく……。
そして、中三の夏あれが起きた。
昔の純粋だった「私」が今の「ワタシ」になった。
妹は植物人間に。
二人ともまともな「人間」じゃなくなった。
人間を止めたのだ。
ワタシの罪を肩代わりするように、いまも妹は眠り続ける。

ワタシは、妹が眠る病室に来るたびに、「ごめんなさい」と謝り続けている。

三章　友達にて

ただいまの時刻午前六時四十五分、今部室にいるのは、ワタシと十羽里くんだけ。
朝日が刺し込まない部室は、とても朝だと思えないぐらいに暗く、電気もつけていない。
静けさが支配していた。
「ふぁースッ」
「スッ！　まさか欠伸まで、その語尾をつけるの！」
狐の眼を行使して、暗い中、本を読んでいた私は、栞を挟めずに

本を閉じて、顔を上げた。
「そうスッね。ほとんどスッね。それより、ツバキ先輩遅いスッ」
「いやいや、ツバキのことより、十羽里くんの、その語尾について話しましょう」
　わくわくしているワタシがそこにいた。
「でもー、とか駄々をこねても駄目よ！　ちなみにどうなの？」
「どうとはなんスッか？」
「例えば、何かに気付いた時、あっ、とかいうよね？　その時も、語尾をつけて、あっスッ、とか言うの？」
　えーとスッね。と考える人のポーズで考え始めた。
「あっスッ。言わないスッ」
「いや、今言ったわよね！」
　とワタシらしくなく、大声で突っ込みを入れていると、ひとりでにドアが開いた。
　そこにいたのは、期間限定の愛玩動物！
「きゃー、かわいい！　お持ち帰りしたい！」
「いや、あれは、ゾンビスッ！」
　あの眠そうに、もにもにしている、寝ぼけツバキ最高！　なのに、十羽里くんたら、ゾンビなんて失礼ね。
　あの幼い弟キャラ、袖で目を擦る仕草がもう、いいのなんの。
「ファ～～」
　もうこの朝の欠伸がもう愛らしい。
「ハナミ先輩の眼が、キラキラスッ。どんなフィルターが、掛かればそんなになるスッ」
　なにか、十羽里くんがごちゃごちゃ言っているけど、ほっといて、もう少しこの弟系愛玩動物を眺めましょう。
「愛玩動物じゃないスッ！　恋人フィルターを通さずに見るスッ。ゾンビスッ、アンデットスッ！　とにかく、現実に戻るスッ」
　肩を掴まれて揺さぶられた。
　はっ！

「ふぁー……おは……よう……ハナミ……十羽里……」
自分のことは棚に上げて、夢現だったツバキがすこし現実に戻ってきた……？
「ひゃあ」
で、ツバキに抱きつかれちゃった。
「な……な、あ……ああ」
十羽里くんは、指でワタシ達を指し、金魚の様に口をパクパク。
「ハナミ」
耳元で吐息が、もうダメ。
「な、なに」
ドキドキ。
「ねるう～。ＺＺＺ　」
「寝るな！」
とっさに突き飛ばしてしまい。
「うがーーー」
ツバキは、開きっぱなしのドアから飛び出っていく。
「がん、ごちん、ガチャンって音がしたスッ。大丈夫スッかね？」
「女の子の、純情を弄んだ罰だわ！」
「いてーなー」
「あっ、お帰りスッ、早かったスッね」
「下の階まで行ったぞ！」
「ふん、ツバキなら大丈夫でしょ」
「まあ、そうだけど、全力で突き飛ばすのは、さすがにまずいだろう」
「八割ぐらいだったことを、感謝してほしいわ。それに、先に言わないといけないことが有るでしょう」
「ふぁ～……なんだっけ？」
「一回、あの世の下見にでも、行ってこようね」
ニコニコして言っているのになんでそんなに、脅えているのかな？
「あ、あの、ハナミ先輩落ち着いてスッ。ツバキ先輩も、寝ぼけて

いたスッから」
「まあいいわ」
「とにかくすまん。寝ぼけていたなら、抱き枕と勘違いして抱いて、ぶっ……ぎゃぁぁぁーあー」
何かを、思いっ切り突き飛ばしたみたいだけど、まいいか。
「まあいいか、で済む話ではないと思うスッけど。それに、ボキッと人の体から、聞こえてはいけない音が、したような気がするスッ。ツバキ先輩大丈夫スッかね？」
「平気平気、十羽里くんが心配するようなことは、何にもないから、そんなことは、横に置いといて、十羽里くんが心配しないといけないのは守君のことだから」
「やっと軌道修正スッね」
「死にかけた」
ツバキが、砂埃まみれになって、とぼとぼと戻ってきた。
「見たまんま、ゾンビスッ」
「やっと軌道修正したのに、もう帰ってきたわ。空気を読んで、そのまま昇降口にいれば良かったのに」
「それもそうだが……てっ、どうやったら、この三階の部室から昇降口まで、突き飛ばせるんだよ！　それになんで、俺が昇降口まで飛んで行ったのを、知っているんだよ！」
「それは、魔法よ」
「そんな設定一回も出てないし、あるわけないだろう！　ん？　よく考えれば、ハナミは、音で分かるか」
「いやいや、あるかもしれないわよ。耳としっぽが、生えてくるくらいだから」
ワタシはわざとしっぽを大きく振り、スカートをはためかせ、手で頭を触りながら言った。
「それも、そうかもしれんが。で、なくってだな」
「やっぱりツバキは、突っ込み役のほうが書きやすいから、今度から」

「「メタネタきたー（スッ）」」
二人に突っ込まれるなんて。
「でも、設定なんって言い出したのはツバキだし。今度から、突っ込み担当はツバキ」
ではモノローグで、もう一回ツバキの紹介、彼が突っ込み……。
「一回自己紹介したからいい！　とにかくストップ！」
「人のモノローグに突っ込みを入れるなんて」
「こうして、ツバキ先輩は、突っ込み役道をうなぎ上りに上がった。でいいスッね」
「突っ込み役道なんて、目指してないから。それに、なんで、十羽里がハナミのモノローグを代弁しているんだよ！　ぜぇ、はぁ……。ふぁ～疲れた」
ツバキが、すべて吐き出したかのように、息を荒げて肩を上下させながら、呼吸を整えていた
「おお、まさか、突込みどころが多いこのセリフの、ほとんどに突っ込むとは。真（しん）の突っ込み役此処のあり。本当に突っ込んではいけない、語尾に関して突っ込んでないところが、まさに真（まこと）。突っ込みを分別が出来ているところが、まさに真（まこと）まさに真（まこと）」
大事なことなので二回言いました。
「なにも目指していなーい！」
「壮大に、突っ込みを入れた後に、それを言われてもね。まあ、どっちにしても、突っ込み役は変わらないわ」
「はあ、諦めるしかないか」
「って、時間ないよ！」
ワタシの目に映った時計は、八時を示していた。
「もう、時間がなくなったじゃない！　早く行くわよ」
「どこに？」
「昇降口」
「じゃあ、早くしないとだめスッ」
ワタシ達は、一心不乱に昇降口に向かった。

「もう来ているわね」
扉のない下駄箱を見る。
ラブレターが下駄箱から、なんてシュチュエーションは無理な下駄箱ということ。
「誰かさんが寝惚けるし」
「朝は低血圧のうえ、夜はあんまり眠れない。それに、一回寝ると、体動かなくなるし、仕方がないじゃないか」
「次は、徹夜ね」
ワタシはにこにこしながら言う。
「ふぁ～授業中寝てやる」
「いつものことじゃない。それに、授業を受けなくっても、勉強できるからいいじゃない」
「いや、昼飯食えなくなるからよくない」
「食いしん坊属性なんて、あったかしら？」
「ないけどな、でもハナミの作ってくれた弁当が、食べられないのが、さらによくない」
照れくさそうに言っていた。
「やっぱりそういう関係何スッか！」
「ただ単に、これはツバキが、不健康そうな食事ばかりとっているから、それに、これは部ができてからの約束」
「じゃあ、俺の分もお願いスッ」
「別にいいわよ。明日あたりにね」
「あっさりと、了承が得られたスッ。もしかして、二人は……。でも」
「でも、その約束は守られる事はなかった」
「悪かったスッ。変なモノローグを入れないで欲しいスッ！　言霊が怖いスッ」
「まあ、明日までに、この件が片付いたらね」
「さっそくスッ！」

っで、話しながら、移動していたら。
いつの間にか守君のクラスの前。
「一人さびしく読書、と思っていたけど違うな。友達と話しているみたいだな」
真面目モードのツバキがぐるっと、守君の教室を見て言う。
「そうっすね。てっきり、いじめられる人は、友達がいないと思っていったスッ。後ろ側で、堂々と話しているスッ」
「たまにあるわよ。特に女子のいじめとか、このパターンが多いかな」
「表面上だけよく、裏でこそこそスッか」
「まあほとんどだけど……。あの二人の会話を聞かないと、どっちか分からないわ」
「じゃあ、いつものように、オレが守に話しかけてきて、ハナミが聞き役」
「一様十羽里くんは、ツバキについて行って」
「了解スッ」
「じゃあ、うまく二人の会話に溶け込んできてね」
こくと、ツバキが頷き、会話をしている二人に向かう。
慌てて、十羽里くんが追掛けて行ったところで、ミッションスタート。
「おはよう。守」
「おはようスッ」
と、ツバキと十羽里くん。
「おはようございます。ツバキ先輩、十羽里くん」
「えっと……この人たち誰、守？」
と、守くんと会話していた男子。
容姿はそこそこ、短めの髪が特徴。守くんよりも大きいわね。
逆かな、守君が特別小さいわね。
「えっと……二人は……」
あの態度からすると、あの後でも、この男子には、導き部に来た

ことを言っていないわね。
「部のスカウトに来た、二年の総諄（そうしゅん）ツバキ」
「お、俺はその付添いで、一年の月下十羽里（つきのした）スッ」
「う……あう、そうです。僕のスカウトで、昨日からちょっと……」
守君が、目をそらしたら、そこでワタシを見つけたらしく、こっちを見つめる。
ウィンク一つ。
解ってくれるかな？　話を合わせてくれて、ありがとうね。
「守のスカウトに来たんだが、お前もよさそうだな」
「いいえ、自分は、もうほかの部活に入っているので、それでは……」
と去ろうとする男の子に、
「ごまかそう、としたって無駄スッ。この洞察力三万を誇る十羽里スッ。お前は部活に入っていないスッ」
びしっ！　お前が犯人だ！　と言う感じで腕を突き出し、男の子を指した。
「ひええ、なんで」
「いやそんな力ないだろ十羽里。それに洞察力がいくら高くってもそんなことは……、できるかもしれないが、お前は無理だろう」
はい、もちろん事前調査の賜物。
昨日のうちに、守君のクラス情報に目を通しただけのこと。
「もうちょっと、乗ってくれても、いいじゃないでスッか」
「ただお前は、かまを、かけただけだろう」
「はは、ばれたスッ」
「横道にそれすぎたな。じゃあ改めて、守そいつの紹介をしてくれ」
「彼は、友人の砥部（とべ）です」
「友人じゃなくって、親友だろう」
「親友でもいいけど、砥部とは中学からのなかです」
「そうか、白か、砥部はうちの部活に入る気はないか？」
「なに部でしょうか？」

「……あっ……やべ」
あの、あほツバキ！　白と言っても、迂闊なことを言っても駄目じゃない。
あくまでも、白に近い灰色なんだから。
「おはよう！　守、砥部」
守君たちに声をかけてきたには童顔の子。
背も、守君と同じくらいか、低いぐらいだから、さらに幼く見える。
「あっ、おはよう。啓太（けいた）」
「おはよう。啓太君」
「守、いつも言っているけど君付けしなくっていいよ。啓太と呼んでよ」
ははと、苦笑する守君。
そして、啓太君はツバキ達を見て、
「あの人たちは上級生だね」
「まあ。ツバキ先輩と一年の十羽里くん」
「へえ……そうか……一人はためか」
にやりと口元がゆがんだように見えた。でも一瞬だったからどうなのかな。
今回の件は、頭がよさそうな人が黒幕だから、こんなにも露骨に疑われるようなことは、しないかしら。でもあえてしているかも。
「ところで、ツバキさん、何部なんでしょうか？」
「あっ……砥部だっけ、えーとだな」
ワタシなら最高の言い訳と、部が思いつくのに。この距離がもどかしい。
でも、ここでこそ、十羽里くんの真化を見せるところ！
「ツバキ先輩あれですよ。……あれ……」
だめでした。
周りが見れば、はっきりと解るぐらい、ワタシはがっくりと肩を落としていた。

キンーコーカーコーン――時間に助けられた二人。
ツバキと十羽里くんが、また勧誘に来るからなと言い戻ってきた。
「二人とも何やっているの！」
つい苛立ちが隠せず、廊下の壁により掛かったまま　貧乏揺すりを始めていた。
「というか、アプローチ下手。でも、ツバキの自爆を十羽里くんが止めてくれると思っていたワタシが馬鹿だったわ」
「ハナミがバカなだけだ、俺に行かせた……ハナミ、こ、怖いんだけど」
「ええ、ワタシはバカよ、ええそうよ。じゃあ、ワタシよりバカなツバキは、三途の川の向こう岸に連れて行かないと、バカは治らないわね」
「ひいい」
ワタシの手がツバキの首に迫る。
「十羽里くん。ワタシが、ワタシよりバカな、目も前にあるものの息の根を止める寸前で気絶させるから。そしたらすぐにワタシを気絶させて、三途の川の向こう岸までに連れて行くから」
ワタシの手が、次第に、ツバキの首に食い飲んでいく。
「勝手に殺すな！　未遂でも罪は重たいからな！　犯罪なんだからな。というか、死ぬんだから、未遂じゃなくなる！」
ギロ
「さあ、解散。ふぁ～すぐにでも、ＨＲに行かないと……！」
ツバキがワタシの手を首から外し、ダッシュで走り出す！
「逃がさないわよ！」
ワタシもツバキを追掛けて走り出す。
「いちゃったスッ。あれはヤンデレだったスッかね。さて俺も教室に戻るスッ」

「まちなさい、ほら」
「や、止めろ。止まれるか。追掛けてくるな」

オオカミに追い掛けられる子羊のように怯えながら逃げている。
何で逃げるのかな？
「だって、ワタシも同じ教室なんだから、ツバキを追掛けるのは当たり前じゃない」
「追掛けるのは別の話だから！　ゆっくり、行っていいからな」
「でも、もうすぐホームルームだから」
手を伸ばしもう少しのところでとどきそうになった、けど、紙一重で届かない。
「さっきはＨＲと言っていただろ」
「それはツバキ。さあ、待ちなさい」
「ひえええ」
だんだん愛しのツバキの背中が迫ってきてくれるわ。
「つ・か・ま・え・た」
だらしない着方をしていたおかげで走っている間、風でなびいてくれた裾を掴むことができた。
「上着、脱いじまえ。でゴール！　でチャイム！」
教室に逃げられた。ああもうちょっとだったのに。
夏服だったら、捕まえられたのに！　チャイムがもうちょっと遅かったら！
「こらツバキ君うるさい。座りなさい！」
担任に怒られるツバキでした。

はあ、もうツバキのバカ。あんなに意地悪しなくても。
ワタシは、じっと座ったまま、右斜め前のツバキの背中を睨む。
ただいま授業中。ちなみに、ブレザーは今もワタシが持っている。
なんでこういう時だけ、背筋を伸ばして授業を受けているのかな。
ワイシャツには皺一つ付いていないし。
いつもなら、目の前が教台なのに、べたー、と机に突っ伏している、アホなのにこれじゃあ、紙屑とか当てて、睡眠の邪魔出来ないじゃない。

「先生、かなり胃が痛いので保健室に行ってきます」
と私の左斜めの子が立ち上がる。今日これで二人目。
なんだろう、ウイルス性胃腸炎でも流行っているのかな。
横に置いといて言っていい話だったかな。
とにかく今は、ツバキに負のオーラを浴びせることで忙しい。
『授業まともに受けろよ……』
ツバキがワタシにしか聞こえない、小声で言っていた。
何よ。ツバキはいつも我が物顔で、寝ているくせに。
『視線で語るな、気持ち悪い。というか、さっきの二人、その嫌な視線とオーラで、保健室送りになっているんだからな』
ツバキはまだ、ぴんぴんしているわね。
『だからって、負のオーラをグレードアップさせるな』
「先生、僕も気分が悪いので」
「好きにしろ」
ぶっきらぼうに、先生が答えた。
『また一人、犠牲者が、まだ一時間目なのに、ハナミ止めてくれ。この教室の、重たい空気を何とかしてくれ。それにほかの男子の視線が痛い。それに、教師がいつ切れるかわからない』
まあワタシと深く関わっているのがツバキぐらいだから、男子に恨まれるのも仕方がないかな。それも怒らせて、この状況ならなおさらね。
『自惚れかよ。まあ一理あるが』
ワタシはツバキをギッと睨む。
『分かった、何でもするから。とにかく威嚇を止めてくれ』
そう、だったら謝りなさい。まず今すぐに一回。
『何を謝ればいいのやら』
とぼけないで、あのミスも謝ってもらってないし、そのあと、馬鹿にしたことも謝ってほしいわ。
『ミスしたのは、悪かったが戻ってくるなり、怒ったのはハナミだろう、一拍置いていたら俺はすぐに謝っていたぞ』

「なによ。人のせいみたいに言わないでよ！　失敗したのは、あくまでも、ツバキなんだからね！」
ワタシはいつの間にか立ち上がって、叫ぶような声で言った。
「どうした、俺の授業が聞けないのか！　この犯罪者の娘」
クラス中の視線を集めていた。ワタシはスミマセンと一言言って座った。
だから人間は大嫌い。
あの教師は何も知らない。確かに急に叫んで、授業を中断させたのは悪いと思う、でも……他人に、あの人たちのことを言われる筋合いわないわ。
『ふぁ～お前、あれはまずいだろう』
ツバキが、何か私のことを注意しているけど無視。
肘を立てて、そのまま手に頭を乗せる。
もう、嫌。
ツバキも嫌い、あの教師も嫌い、みんな大嫌い。
何よ、私は居ちゃいけないの！

全部が敵、何もかもが敵。

そして、イライラと、敵意をむき出しにして、残りの授業を受けて昼休みになった。
時間が開いて少しは、ましになったかな。
イライラは、ツバキに向けてだけだし。
ワタシは、すぐに教室を出た、ツバキには断りもなく。
今日もお弁当を作ってきたけどいいや、捨てるのももったいないし、そうだ、十羽里くんが食べたいと言っていたからあげよう。
すぐさま、一年生の教室がある三階に向かった。
あの子なら、おいしく食べてくれるはずだわ。
ツバキみたいに、あのコンビニの弁当と比べるような事はしないはずだわ。

十羽里くんの教室に到着。
「十羽里くん！」
「ハナミ先輩、急に教室の扉を開けて、叫ぶのは止めてくださいスッ！」
ワタシに十羽里くんのクラス中の視線を集る。
一度、静まり返るけど、すぐにそれぞれ話に戻った。
「一緒に食べよう」
「先約があるスッ」
と言い十羽里くんが後ろを振り向く。
「「「別にいいぞ」」」
「薄情な奴らスッ」
「たぶん違うよ。あの視線は」
がんばれ、とかそんな感じの視線。
普通は、逆だと思うけど。
「でも、どこで食べるスッ。教室は気まずいスッよね」
「そうね、廊下でいいわよ。守君のことも観察したいから。それに、ワタシが作ってきたお弁当もあるわよ」
十羽里くんがパッと笑顔になった。
「上級生は、廊下で食べている人、多いスッよね」
「そうよ。夏とは、廊下の方が涼しいから。クラスのみんなが、廊下で食事ということもあったわ。それに、日差しが入らない北側に窓があるから、尚更ね」
と言い、廊下の窓側の壁に背中を預けるように座る。それも守君のクラスの目前に。
そういえば、ツバキは、廊下で食べるの、あまり好きじゃなかったわ。
人が通るのがヤダとか言っていたわ。
「でも、昼休みの初め、なんでこんなに、廊下人が通らないスッかね？」
「学食はないし、購買部も、あまり人気がないみたいだから、それ

に、みんな一斉に食べ始めるからかな。はい、これ」
「ありがとうスッ」
ニコニコと、ワタシの弁当を受け取ってくれた。やっぱりここがツバキと違うわよね。
十羽里君が弁当を開き、タッパからサンドイッチを取り出す。
「おいしそうなサンドイッチですね」
「いつもは、ちゃんとしたものを作るんだけどね。朝早かったのと、守君の監視と昼食を取りながらでも、できるように、と思って作ったんだけど――」
「心配、いらなさそうスッね。ちらっと見たスッ。朝の三人と仲良く食べているが見えたスッから」
「会話も、おかしなことになっていないし、大丈夫そうね」
盗聴みたいで気が進まないけどね。
「じゃあ、いただきますスッ」
十羽里くんは、パッンと手を打ち合わし、ワタシが作ったサンドイッチをほうばる。
「いただきます。どう、おいしい？」
「おいしいスッ。このハムサンド。歯ごたえがかなり計算されていたスッ。このキャベツがいいスッ。油が多めのハムにマッチするスッ」
「ありがとううれしいわ」
「こっちの卵サンドもいいスッね」
「ほんとおいしそうに食べてくれると、ワタシも作りがいが有るかな。ほんとツバキと違うわね」
「これ、もしかして、ツバキ先輩に、あげる弁当だったスッか」
「そうよ。別にいいわよ。一食ぐらい抜いたって死なないわよ。たぶん、もっと抜いても、死なないと思うけど」
ワタシも十羽里くんにあげた弁当と同じ弁当を取り出す。もちろん中身はサンドイッチ。
「喧嘩したんスッか」

「そうあの追いかけた後、あれまでは、まだ冗談半分で、やっていたところもあるわ。でもね、そのあと、あいつが、ワタシが悪いって言うから、カッとなってね」
「話が見えにくいスッけど、守のアプローチ中、ツバキ先輩のミスで、ハナミ先輩が戻ってくるなり怒鳴ってスッよね」
「そうよ！　自分のミスなのに、それを棚に上げてさ、ワタシが、いきなり怒鳴るのが悪いって言うんだよ！　十羽里くんは、どう思う」
「ツバキ先輩が悪いスッ」
「そうよね。あんな意地悪しなくっても、いいのに」
「ハナミ先輩が、自分の非を認めた時スッよね」
「バカなんていわれて。謝ってほしいわ」
「でも、ハナミ先輩、戻ってくるなり怒鳴るも、ひどいスッ」
「なんで十羽里くんも、ツバキと同じこと言うの！」
「怒鳴らないで落ち着いて聞いてほしいスッ。ツバキ先輩、戻り際に、失敗したな、すぐに謝らないとな、と言っていたスッ」
「あっ、そうだったの、悪いこと、しちゃったかな。でも、意地悪したのは、許せない」
「ハナミ先輩、開口一番に、怒鳴られたらどうスッ？　ちょっとした、仕返しぐらいしたくなるスッよね」
「ああ、でもでも」
「立場が、逆だったらどうスッ。意地悪ぐらいはしたくなるスッ。俺が十羽里先輩の立場でも、そう思ったスッ」
　そうかもしれない、なんでいつも、気が付けないのかな。悲しいぐらいに、人を傷つけるのかな。
　目じりがじわっと熱くなった。
「ハナミ先輩どうスッ。謝りに行くスッか」
「そうね。……謝りたい。ツバキにごめんなさいって言いたい。まだ間に合うかな？」
「大丈夫スッよ。たぶん、十羽里先輩は、許してくれるはずスッ」

ワタシ達は、弁当を仕舞い立ち上がる。
「そうね。行ってく……」
駈け出そうとしたとき、守君の友達が二人とも教室から出できた。と思ったら、ガラが悪い、ゴリラ顔の子が守君の教室に入っていった。
「あれ、多田スッよ」
「守に話しかけているわよ。て、連れて行かれたわ。追掛けるわよ」
「でもいいんですか、こういう時、ツバキ先輩いない時は追掛けていけないと、ハナミ先輩が、言っていたような気がするスッ」
「臨機応変に、今はまず追いかけるのが先、それにいざとなったら、十羽里くんが守ってくれるでしょう」
「え、そんなの無理スッ。俺、戦闘能力一もないスッ。皆無スッ」
「まあ、危なくなったら逃げましょう」
「守を見捨てるスッか」
「捕まえて逃げるということだよ」
すたすたと追いかける。でも、目の前に守君と多田の姿はない。
何度も言っているけど、ワタシは耳がいい。
人、一人ひとりの足音を聞き分けることもできる。
だから、変に、物陰に隠れながら、付けることを、しなくてもいいので、守君と多田が去った後に移動開始。
「こっちよ」
「はいスッ。で、ここどこスッか？」
「体育館下の武道場前。今は、武道場を使う部活もないから、ほとんど人が来ないね」
「体育館裏よりも、こっちの方が都合いいスッか」
「そうね。体育館裏は、意外と人が通るから」
「あそこは、チャリ用の出入り口スッよね」
「静かに」
守君を発見、でもその周りには数人、多田を含めた単純にヤンキーぽい男子がいた。

「なにか、言っているスッね」
「聞くから静かにして」
ワタシと十羽里くんは掃除用のロッカーの影に隠れて、盗聴開始。
「守よ、お前俺らとの約束を破りやがって！」
多田が叫ぶ。守君は体をビクつかせ、俯く。
「な……何のことかな……」
「ふざけんじゃねえ。お前、導き部に言ったらしいな！」
「あ……」
「そうだ、ネットの掲示板を見たか、最高だっただろう」
守君は、その場に耳をふさいでしゃがみ込んでしまった。
「じゃあ、お前が約束を守らなかったんだから。その制裁を受けないとな」
パキパキと手の節を抜く多田。
「でも、もうしゃがみ込んでいるし。踏んであげるか」
パシャ
足を上げたまま多田の動きが止まる。
「おい誰だ！」
「導き部のハナミよ。よろしく」
ワタシは掃除のロッカーの影から身を出す
「ハナミ先輩、何やっているんですか！　こそっと撮ればいいじゃないスッか！」
十羽里くんは、手を影からだし、ワタシの服を掴みながらロッカーの影から出てくる。
「まあまあ、十羽里くんは落ち着いて、守君助けに来たわよ！」
守君は顔を上げた。
希望の星が見つかったように、顔が晴れ渡った。
「ふざけるな。女と、そこのひ弱そうな男子で何が出来る。やっちまおうぜ」
「ストップ。これなんだか解る？」
ワタシは携帯を取り出し、さっき撮った写真を見せる。

「ふざけんな。何がしたい！」
「さっきから、ふざっけんなばっか、ボキャブラリーが少ないこと」
「はああ、なに言ってだ。っつーか、その携帯こっちに渡せ！」
「いいわよ」
「何やっているんスッか。はっきりとした証拠スッよ」
「まあまあ」
多田は、ワタシの手から携帯を奪い取り、操作し始める。
ほんとこの子達は、おバカね。
「全部消してやった。でもな、しゃくにあわねだよ」
支離滅裂ね。
たぶん何言ってもこの子たちは、殴ってくるね。
十羽里くんも、なんで携帯をあっさり渡したのか、分かってないみたいだし、種明かしでもしてあげましょうか。
でもそのまえに。
「あのさっ、まず携帯返して」
「ふん」
携帯は放物線を描くように投げられ、ワタシの前に落ちる。
携帯を拾いながら。
「じゃあシャッター音を出して撮ったことと、あっさり携帯を渡したことの種明かしでもしましょうか。まずシャッター音から」
ワタシは不敵に笑みを浮かべる。
「まあ、単純に守君が踏まれそうだったから、こっちに注意を引いて、守君に危害が加えられないようにするためよ」
「そうだったんスッか」
ワタシが種明かししている間も、じりじりと、多田たちが壁際にと詰め寄ってくる。
話を聞く際ないみたいね。
「それと、あとは携帯の種明かしかな。たぶんさっき、携帯は初期化されて、記憶メディヤのデータも飛んじゃったと思うけど、もうメールで、パソコンに送ったから、いくら消しても無駄って言うこ

と」
「そうすか。じゃあなんで種明かしを今、したんスッか？」
「それはね……」
まだ来ない、早く。
多田達も、詰めよっては来ていたけど、ここまで聞いてなにもしなかったけど。
ダメね。
「じゃあ、後でパソコンも破壊してこねえと……」
多田は拳をつくり。
「じゃあ、ここでくたばっていろ！」
「危ないスッ！」
ワタシの前に十羽里くんが飛び出した！
ワタシの事なんか、庇わなくっていいから。
にげて、あなたは傷つかなくっていいの！　だから、そんなことしなっていいの！
多田の握り拳が飛んでくる。
パッン
「痛……くないスッ」
十羽里くんの前に人が立っていた。
多田の拳はその人によって受け止められている。
「間に合ったな……大丈夫か、ハナミ、十羽里」
拳を受け止めた子が振りながら言う。
「遅いわよ、ツバキ！　後、ごめんなさい！　ひどいことばっかり言って、何もしていないのに、本当にごめん」
ワタシは、ぼろぼろと涙のしずくを落としていく。
「はは、いいって。それに俺も悪かったな、すまん意地悪して」
余った片手で謝るポーズをとる。
「いいよ。謝ろうとしていたのは、十羽里くんに教えてもらった。それに、ワタシもツバキの立場なら、意地悪していたかもしれないし」

「うん、許す。そして俺も悪かった。あのとき、逃げなかったら。ハナミを怒らせることもなかったと思う、だからごめん」
「うん、ぐす……うん。ありがとう」
本当いい所ばっかり持って行って、ほんとう、ワタシだけのヒーロー。
「よかったスッ……」
十羽里くんは安堵からか、それとも恐怖からか、その場に、ペタと座り滝のように泣き出した。
「うっぜんだよ。なんだてめえ、人のこと無視して、イチャイチャしてんじゃねえ！」
「ツバキ前」
「ああ、ふぁ～えい」
多田のこぶしを握りっぱなしにしていたツバキは、その拳を捩じる。手のひらが上になったところで持ち上げる。
すると多田が爪先立ちになり、持ち上げられた手に、釣り上げられる様になった。
「ぐああ、くそ離せ……ぐあ」
「ふん、力任せに振り払おうとすると、手首が外れるからやめろよ」
あれ、痛いんだよね。合気とか言っていたけど、正直あれは真似出来ないよね。
「くそが、てめえら、ぼさっとしてんじゃねえ」
と多田の声共に多田の後ろにいた、手下らしい二人が、多田を挟んで左右に立ち、同時にツバキに殴り掛かる。でも大丈夫。
「ああ、こんなに直線的だったらダメ」
と言いながら、ツバキの左側の子に、釣り上げていた多田をぶつけ吹き飛ばし、右の子には、素早く右手を溝内に打ち込む。
「うう、……」
溝内にもろに食らった子は、その場に崩れる。
「あっけないなふぁ～」
ワタシ達は、すぐに守君のもとに行く。

「はい、保護完了」
「助けてくれて……ありがとうございます」
うずくまっていた守君が顔を上げる。
「ふざけんじゃねえ」
揉みくちゃになって倒れていた、多田ともう一人が立ち上がった。
「ふ～ん。じゃあどうするつもりだ」
多田が、パチンと指を鳴らすと、うじゃうじゃと、武道場から人が出てきた。ざっと二十人。
「ゴキブリみたいね。十羽里くん」
「ネズミ講算式に増えるスッね」
「いや普通そこは、ゴキブリを見つけた様に一匹見つけたら二十匹だろう、本来は三十匹らしいが、ふぁ～多いな」
「ごちゃごちゃ、うるせえ。やっちまえ！」
とこんな会話をしている間に、いつの間にかワタシ達は多田達に囲まれていた。
そして、襲いかかって来た。
「ぎゃああスッ」
十羽里くん、そんな情けない悲鳴をあげないの。
守君は小さくなって、ガタガタと震えているし、ツバキがいれば安心していいのに。
って、ワタシしか知らないか。
「はあっ」
ツバキが、気合を入れたと同時に、ワタシの目の前にいた三人が後ろにいた子を巻き込んで吹き飛ぶ。
「なにをやっているんだ。相手は、もやし子二人に、女子とそこのやつだけだろう」
多田が、叫ぶけど無駄。次々とツバキは薙ぎ払い、無力化していく。
右に一歩そして掌底（しょうてい）を左手で顔にかまし、すぐ後に裏拳で後ろから襲ってきた子を倒し、正面から竹刀で殴りかかって来た子には、

その竹刀を右手でつかみそのまま引き落とす。
必要最低限の力で効率よく、無力化していく。
カッコいい、前もこんなことが……そう、初めて会った時も。
そのころからのヒーロー。
「はやいはやい、あと二人ね」
「昼休みってもんが短いから急いでいるんだ。ふぁ～」
そしてさらに一人、痙攣しているのがちょっとグロテスク。
「くそ」
「さあ、あと多田だけか」
「ひいいい」
多田が尻持ちを突き、ずりずりと下がっていく。でもツバキが、危険を表す赤色に見えた。
「ツバキ！　危ない」
最初に、溝内にパンチを食らってのびた子が、立ち上った。
その手には鈍色（にびいろ）に光る物が……、
ザック
「うあああ」
十羽里くんは、情けなくまた悲鳴をあげる。
守君は、目を深くつぶり、さらに縮こまる。
ワタシは両手を口元に当てていた
だって、ツバキが、後ろから、刺されていたから。
心血が飛び、ワイシャツが赤く染まる。
血だまりができる。
そして、ツバキは前に倒れた。
血だまりから血が飛び散る。
ツバキは動かなくなり、目を開いたままに。
「おい、お前それは……」
多田は、刺した子を睨む。
「うああ、俺は何を！」
刺した子は、血に染まった手を見て、震えだした。

「と、とにかく逃げるぞ」
多田と刺した子が転びそうになりながら、階段に向かって走り出す。
ツバキを刺したナイフを残して。
「ふぁ〜、逃げるってなんだ？」
背中から心臓あたりを刺されているはずのツバキは、何もなかったかのように、立ち上がる。
あちらこちら、血で濡れていた。
「ば、ば、化物だ」
「ひええ」
さっきの二人が腰を抜かし、尻餅をつく。
「化物か。まあそうかもな」
一歩、二歩と踏み出す、足跡は赤黒く、手からは血が垂れて、顔の半分は赤く染まり、一滴の血の滴が顔を伝り落ちる、まさしく化け物だった。
「ツバキ先輩なんで、立てるんスッか！」
「それは、オレが神だからだ！」
どや顔をする。
「はあスッ？」
十羽里くんの顔には、突っ込みキャラの、ツバキ先輩が何故、こんな所でボケているのか、不思議スッ、と顔に書いてあった。
「十羽里くん。ツバキがボケているんじゃなくって、本当のウソ一つない、事実だから」
「ツバキ先輩は神なんですか？」
「そうよ、何の神様なのか知らないけどね」
ワタシは、したり顔で言った。
「多田聞いたか、だから逃げなくってもいい。人間がすることなんて造作もないこと、心臓を貫かれようが、頭が吹き飛ぼうが、なんともない。上位種だから死なないし、神様だから、簡単なことで死な無いから。というか、死なない、不老不死、寿命もいつなのかわ

からん。でも、神だからといって神社はないが」
「「……うあああああーーーーーーーー」」
恐怖で声がかすれ、震えあがる二人。真っ青よりひどい蒼白色の顔をしていた。
でも、この格好のツバキは軽くトラウマものね。
「じゃあ、くたばってくれ」
ぼこぼこ、と音が鳴り、二人とも伸びる。その顔には赤色の拳がスタンプされていた。
「お疲れ、ツバキ」
「ふぁ〜、もっと早くメールしろよ」
「決定的な瞬間を撮りたかったから」
「ふうー、ギリギリのところで助けるヒーローに、ならずに済んだのに」
ツバキは苦笑いをして言った。
でも、別にいいじゃないワタシだけのヒーロー。
「それに一斉送信だからね」
「な、なんスッか。それは」
「ああ、なんでワタシが、あんなに落ち着いていたか解る？」
「ああ、そういえばそうスッね」
「十羽里くんにも、メール行ったと思ったけど、パソコンに送った時に、導き部のみんなにも、送信したの。だから、ツバキが駆け付ける事も分かっていたし」
「あっ来ているスッ」
十羽里くんが、携帯を格好つけて、パッカと開いていた。
「で、そろそろこれ抜いてくれるか？」
ツバキが、ナイフが刺さった背中をこっちに向ける。
背中もべったり、血で染まっていて、ちょっと触りたくないけど、
「えい」
「かんたんに抜いていいスッか！」
十羽里くんが手で顔を防ぐようにあげる。

「普通、血がドバドバでてくるはずでは？」
守君が不思議がっているけど、大丈夫。
「おお、抜けた。軽い、軽い。」
「傷がないスッ！」
それに、真っ赤に染まったワイシャツが純白の戻り、血だまりもなくなっている。ワタシの手も綺麗になっている。
さすがにナイフでついた、服の傷までは戻らない。
「眼球に、シャープペンが刺さった事もあるわよね」
「カレンダー、を日本語読みした名前の人みたいスッね」
「十羽里、パロネタは、もっと解りやすく言え」
「じゃあ、あのあらら……もごもご」
ツバキが、十羽里くんの口を、手でふさぐ。
「ストレートに言ってどうする」
「ではこの本を読む前に、化物、「ストップ！」」
十羽里くんの言葉を無理やりさえぎるツバキ。
「というか、突っ込みどころ多すぎだ。　まず、この本ってなんだ。オレ等の活動が小説にでもなるのかよ。月ごとの活動を記録にはまとめているが……、あとパロネタはストレートに言うな！　オブラートに言え！」
「いいじゃないスッか小説化、面白いと思うスッよね、ハナミ先輩」
「そうね、いいわね、小説化。導き部議事録、みたいな」
「ああ、いろんな人を敵に回すつもりかお前らは！」
「それで、アニメになって、第二期までやって、映画化、ハリウットにも進出よ」
「ああああ、ああああ、オレは何にも聞いていない！」
と叫んだところで、蔵ちゃん登場。
「おーい、なんがあったんだ」
「蔵ちゃん実はですね。かくかく云々（しかじか）。というわけですよ」
「ああ分かった」

「いや、蔵田先生、絶対分かっていない。アニメじゃないんだから」
「はは、まあ後でゆっくり聞くことにして、大体何があったかは、見ただけでわかる。でもこれをどうするか」
蔵ちゃんは、のびた二十人近くの生徒を見て、ため息をついた。

見えている悪意（後書き）

最後まで読んでくださいましてありがとうございます。感想や評価お待ちしております。

これ前半なので後半をお楽しみにしてください。

またツイッターをやっておりますのでフォローよろしく！

ひさぶりに更新しました。すっかりとこのサイトの事を忘れていました！

まだまだ未熟物なので、このサイトでジャンジャン投稿しようかと思います。

これも登校したのですが、一次審査も通らず……。

たぶん日本語の部分でおかしなところが残っているはずです。そこを指摘してくださると大変助かります。

告知やお願い事はまずここまで、いじめについて話します。

作家自身も小学校のころ、いじめられて過ごしました。

子供ってひどいですよね。醜いところがあればすぐに批判し、何かにつけて、罵声を浴びせ。

汚い黴菌扱いでしたね。

パソコン室で小学生ながらも、自分にの批判スレがありました。あれには驚きましたね。しかも、ほかのクラスの人をも巻き込んで……。結局、そのあといじめは収まらず、卒業式二日前に殴り合いのけんかを……。

キレやすい危ない小学生でしたね。そのあとは中学で柔道とか空手で力を身に着けいじめられなくはなりました。

逆に自分が危険人物になったので、けんかの仲裁とかやったら、けがをさせる立場になってしまう……。

だからこそ、こんなラノベも書けたんですし、まあ普通に体験で

きないことを体験してきたことには自信があります。
本当に最後まで読んでくださった方ありがとうございます。後半をお楽しみにまた！

見た悪とその回答集。（前書き）

後半です。

見た悪とその回答集。

章間弐　ツバキ

まあまず、オレは神様、そこんところよろ。
何の神様かは知らないが、これも、ハナミと一緒でアバウトアニマルによってなった結果だ。
簡単にざっくりと、神様になった経緯を話す。
まずこの学校に入ってから、オレの両親が別れたのだった。
原因は、母親の不倫。
オレは父親の方に引き取られたが、父親は、その後過度のストレスと、無理な労働で倒れ、死んだ。
そんなことが、一週間のうちに起きた。
父親が死んで葬式の時も、母親は来なかった。ただ、遺産をどうするかという話の時だけ来やがった。
そして、全部、盗んでいきやがった！
その時、オレは人間を信じるのを止めた。
残っていたのは、家と土地の権利書のみ。バイトをして、この家で暮らそうと思ったが、ライフラインの確保や、税金を払うだけでいっぱいになってしまう。
そして、家、土地を売り、ぼろアパートで一人暮らしを始めた。
もうその頃には、心身ともボロボロだった。
そんな時、ハナミはオレを見つけた。
オレがハナミを助けた後、気にかけてくれたりしたが、どうでもよかった。
そんな時、ふと、ネットサーフをしていると、アバウトアニマルのサイトを見つけた。
携帯で見ていたとき、ハナミにそれを指摘された。
オレは思わず、その場から逃げ出した。

安易に、神様なら、こんな苦労もないだろうなと思い、アバウトアニマルに、神と入れた。
が、見た目は、何も変わらなかった。
追掛けてきたハナミは、ワタシは半分狐と暴露。だからこんな思いしたくなかったら、とか言っていたが、もう遅くオレも、神と、アバウトアニマルに書いたと言ったら。なんで変わっていないのと質問攻めにあった。
後で、自分が化物になったことを思い知らされる……何をしても死なないということが。でもそれはまた別の話。
その時の、狐耳、ハナミが可愛いの、なんのって、にへへ、おっと、おかしな方向に行ったな。
まあ、だからこんな感じで、オレは人間嫌いの神様！

第四章　人間失格にて

放課後、ただいま導き部の部室。
部室の中には、ワタシとツバキ、十羽里くん、守君、それに守君を心配して来た、啓太君と戸部君もいる。
守君が相談していることを二人に話したということなので、二人にも来てもらった。まああの子らも来る気満々だったみたい。で、蔵ちゃんは、多田達に説教をしていて今はいない。
ワタシとツバキが黒板を背中に座り、その反対にはワタシから見て右から、砥部君、守君、啓太君の順に座っている。
そうそう十羽里くんはというと、ドア側付近のお茶入れで、今、人数分のお茶を入れているところ。
「でも水臭いな、守」
心配そうに啓太君は守君を見る。でも、目がそうは語(かた)っていないような気がした。
「黙っていてごめん。啓太くん」
「ま、いいって。こうして話してくれただけでもうれしい」

「そうだぞ、俺のことも頼っていいだぞ」
と胸を張って、砥部君が言う。
砥部君は心配よりも、導き部に相談していたことを、黙っていたことに怒っているみたい。
「うん、二人ともありがとう」
「お茶が入ったスッ」
とタイミング良く、十羽里くんがお茶を持ってくる。
湯呑に入ったお茶をみんなの分、置くと、お茶入れの前に戻る。
「さて、守くん、十羽里くんから聞いたのだけどあなた、授業と授業の休みに間になるといつも携帯を開くそうね。何を見ていたのかな？」
守君は、口を堅く閉じて俯いた。
「何か大きなことを隠しているわよね」
啓太君が聞き耳を立てるのが目についた。
「……」
「何も言う気がないなら、はいの時は頭を縦に、いいえの時は横に顔を振って」
守君の頭が縦に何度か振れる。
「守君、今あなた、アバウトアニマルのサイトに何度も行っているでしょう」
守君は小さく縦に振る。
「やっぱり」
「なんで、話してくれなかった。守」
砥部君は血相を変え、青ざめた顔になり、心配をしていた。
「人間を止めるなんて思わないでほしい」
啓太君は、口元をゆがめたまま、心にない事のように言っている。
「そう、ワタシからもお勧めしないわよ。アバウトアニマルは」
「そうっだな。ハナミの言うとおり、やめておいておいた方がいい。最悪の場合、化物扱いだからな」
「俺もやめた方がいいと思ったスッ」

「人間を止めるのは、安易な気持ち、気の迷いで決めないでね。苦労するだけだから」
これ以上、何も言ってあげられないし。相談もできない。
「ごめんね、ちょっといろいろ対策を考えるから、砥部君と啓太君は、守君を家まで送って行ってね」
「は……はい」
「それではさよなら」
守君を支えながら、啓太君が出ていく。砥部君は出る前に、
「あっ、ハナミさん、ちょっと耳を貸してください」
「なにかな」
「守はほかにも、大きなことを隠している気がします」
「そうね」
そうあれだけではない。
「では、さよなら」
「ばいばい」
砥部君が部室のドアを閉める、と同時に、
「あの二人お茶飲んで行かなかったスッ！」
憤慨や、噴火という言葉が似合うような感じで、急に十羽里くんが怒り出した。
まあ、無理もないね、唯一の取り柄と言っていい、お茶が飲まれなかったのだから。
「まあまあ、時間もなかったんだし仕方がないわよ。でも、守君は全部飲んでいったわよ」
いつ飲んだのか分からないけど、いやほんとに分らなかったわ。ある意味ミステリーね。
「いいじゃないか、お茶の一つ二つ、俺が飲む」
と急に蔵ちゃんの声がした。
「いつの間に入ってきたんですか！　マジびっくり！しかも定位置」
ツバキだけが反応、十羽里くんは、のの字を書きながらしゃがんでいた。お茶も駄目スッ、お茶も駄目スッと言いながらだから、ち

ょっと横に置きましょう。
「はは、ツバキくん、この世には魔法の一つや二つあるんだよ」
「いえ、ないですから。何があってもないと言い張りますから。というか、そんな魔法ならいらない！」
「神様が無いと言っているんだから無いか」
「神様と呼ばないでください！　しかもオレは全知全能の神様じゃないです」
　神様の事でいじられると怒る。ツバキが自分の事で怒るのは唯一これだけかな。
「蔵ちゃん嘘はだめですよ。こっそリ入ってきて息を殺して、ワタシの裏に隠れていただけですよね」
「ばれたか、さすがに耳がいいと分かるか」
「でも、人には聞こえない音しか発っていないので、成功ですよ。合格点です」
「訓練したかいがあったな。ではミッションに行ってくる」
「訓練って、なんですか！　というかいつの間にやっていたんですか。しかもミッション、何するつもりなんですか」
「女子更衣室の覗きに」
「警察、警察はどこだ！　ここに犯罪者予備軍がいます！」
　こんなことを言いながら、ツバキはちゃっかり携帯を取り出していた。
「大丈夫よ、ツバキ。ワタシしかいない更衣室でだから」
「だめだ。そんなあられもない姿を……ハナミもハナミで、なに、犯罪に協力しているの！」
「まあ冗談だ。落ち着け」
　蔵ちゃんはどうどう、といいながらなだめた。
「蔵ちゃんなら、犯罪にも使うことなんてないわよ」
「そうそう、娘の部屋に、こっそりと入るつもりはないから」
……。
　これで察してください。

「その話は、横に置いといて本に題入りましょう」
「うい。おい十羽里、何時まで、くよくよしているつもりだ。ふぁ～飲んでもらえなかったのは、残念だったが、今度は見た目でも、そそる物を作ればいいだろう」
「そうスッね！　がんばるスッ」
十羽里くんはすっくと立ち。晴れ渡ったいい顔をしていた。切り替えが早いのはいいことよ。
「俺を無視しないでくれ！　これじゃあ、変態なオヤジになってしまうだろ」
「蔵田先生、居たんスッか！」
「うおお、十羽里にも無視されていたとは」
「はいはい、本当に本題に入るわよ！」
ワタシ達は、定置に着く。
ワタシが黒板を背に立ち、その向かいに、十羽里とツバキが座る。蔵っちゃんは、ずんと沈んでいたけど、しっかりとドア付近に立つ。
「じゃあ、守の観察について報告スッ」
ばっと、十羽里くんが立ち上がる。
「守がしていたおかしな行動スッ。これはさっきも言っていたスッけど、休み時間、携帯を覗いてじっとしていたスッ。あと、これは時間が無くって言えなかったスッけど、休み時間、一人になって、どっか行くみたいスッ。いつもニコニコ顔で戻って来るスッ！」
「二つ目の行動は調べる必要がありそうね」
「あとは特におかしな行動はなかったと思ったスッ」
と言い十羽里くんは座った。
「ありがとうね。誰かさんとは大違いね。アプローチを失敗した誰かさんとは」
「蒸し返すな！」
ツバキがガタと、立ち上がって言う。
「くすくす、まあ冗談は、横に置いといて。十羽里くんホントいい仕事したよ。ありがとう」

「へへへスッ」
「バカそうな顔しているのに。畜生」
ツバキが本気で悔しがっていた。
「勉強が全てでは無い、ということだな」
沈んでいた蔵ちゃんが復帰し余計な一言を、
「ぐはあ」
口から、血をだらだらと流して、ツバキが、机に突っ伏す。
「！」
という感じに、精神的ダメージで、死にかけている。
でもツバキがいつもと違う意味で机に突っ伏しているのは本当珍しい。
「蔵ちゃん、言ってはいけない一言を言って瀕死状態までにすると
は、恐ろしい。無神経にもほどがあります」
「俺は、本当に……」
がっくしと、うな垂れる。
「蔵田先生は、なんでこの部の顧問をやっているんスッか？　性格
上あっていないスッ」
「そうかもな。俺は、何をやったってだめで……」
さらにしゃがみ、体育座を始める。
「蔵ちゃん落ち着いて、何も攻めようとも思っていないですよ。ただ、純粋にどうしてこの部顧問を引き受けたか聞きたいだけですよ」
もう、十羽里くんは、あまり考えずに言うから。蔵落ち込んだまま――ちゃんが立ち上がり、パッと明るい顔になる。切り替えし以下略ね。
「ああそうか、お前らにも言ってなかったな。なぜかと言うとだな。ごく〇ん、に憧れだ」
「不純な動機だった！」
「びっくりしたスッ」
死にかけの、ツバキが、がばっと起き上がり突っ込み。突っ込み役の鏡ね。

ワタシも正直ビビッた。
「いや冗談だ。俺に娘がいる事は知っているな」
みんな、一回だけ頷く。返事をする空気じゃなかった。
遠い眼をして言った。
「娘たちは、この学校に入りたいと言っているんだ。制服がかわいいとか、進学率も悪くはないからとか言っていたな。俺は娘達が決めたことには、とくに反対はしない。だがこの学校の、教師のそっけなさや、治安が悪いといってもいいぐらいのいじめや、現金の抜き取りがある。そんな、見えるごたごたと、この学校の、見えないところで動いているものを、娘達が入る前に、全部取り除きたいと思っていてな。今年一年しかないんだが……」
そこまで言うと、夕日が差し込んだ窓を見る。
その日差しは、蔵ちゃんの顔にあるしわに影を落とす。
蔵ちゃんが顔の向きを変える。
それまで、何ともなかったところが陰になる。
まるでさっき蔵ちゃんが言ったように。
「ワタシも、もっとこの学校が、いい学校になるようにと思って、この部活を作りました。一番大きかったのが、ツバキとの出会いです。そして、彼が神になったことですね。ワタシやツバキみたいな境遇の人物を、作らないようにするため。でも、蔵ちゃんの夢にも、導き部は手を貸します。蔵ちゃんの娘さんたちが、入ってくるまで、何とかしましょう！」
ワタシは、右手で帽子を取って言った。
ワタシにとってこれは、決意の表れを示す行動。
「いいスッ。俺もやるスッ！」
十羽里くんは、すっくと立ち上がる。
「仕方がないな。でも、今年度の目標には、ぴったしだな」
そんな事を言いながら、立ち上がる。
ワタシは帽子を握った手を前に出した。
その上にツバキの手が気だるそうに置かれ、次に十羽里くんが、

すっと手を置き、最後に、すべてを包み込むような、蔵ちゃん大きな手が置かれた。
「今年の目標に向かって頑張りましょう！」
「「「おおう」」」
夕日が差し込む部室で、気持ちを新たに導き部は出発した。

「でもまず、目の前の事を片付けないと、いけないな」
「あ、うん……」
ツバキ空気を読もうね。
まあ、この話がどうにかならないと、どうも仕様がないから、仕方がないけどね。
ワタシはニット帽をかぶり、みんな定置について、
「で、どうするスッか？　ハナミ先輩は、砥部か啓太のどっちかが、怪しいから呼んだスッよね」
手を挙げたりすることなく、急に十羽里くんは話し出した。
「一応、そうね」
「だと、明らかに怪しい行動をしていたのが、啓太か？　だとそいつにかまを掛けるということだな」
「ツバキ、そう決めつけちゃいけないわよ。もしかしたら、守君が知らないところで、恨みを買っていたかもしれないわよ」
「それだと誰だか判んないスッね」
「そうね。今考えたら、一時の恨みで、こんなことにはならないわよね。人が殺されたとかなら別だけど」
「ハナミ、物騒なこと言うなよ。それだと守が嘘付いている事のもなるし、それに、殺人が起こっていたら、守を直接警察に突き出した方が早いだろう。それに、そんなことを疑い出したらキリがないだろう」
「そうね、ツバキの言うとおり、身近の二人に、焦点を絞ってみましょう」
「じゃあスッ。かまを掛けて明日には解決スッね」

ガッツポーズを取って喜ぶ、十羽里くん。
「いや、まだ賭けに出るには早いかな」
「そういえば、多田たちは、金の為にやっていたとか言っていたな」
ぼそっと、蔵ちゃんが呟いた。
「蔵ちゃん、それどういうこと！」
つい、素手で返してしまった。
「ああ、多田たちは、金の為に、ある人から雇われてやったとか言っていてだな、まあだから、適当なことを理由に、守を殴っていたとか。スッキリするから、丁度よかったと言っていた。ふざけた野郎だ！」
がんと一回だけ強く足で地面を踏む。
「蔵ちゃん、落ち着いて、で、そのある人は誰です」
ここが誰だか分かれば、解決したのも同然ね。
「いや聞き出せなかった。俺も聞いたんだか、そのことだけには、頑なに口を開こうとはしなかったんだ」
「じゃあ、自白剤でも科学部に作ってもらって、今すぐにでも」
ワタシは、冗談抜きで、本気で動いていた。
「ハナミ、ストップ。いくら蔵田先生が生徒指導でもだ、何をやってもいいわけではない」
「それもそうね。ワタシもどうかしていたと思うわ。止めてくれてありがとうツバキ」
「ふぁ～別にいい」
「それにだ、多田たちは、もう帰ったぞ」
「分かりました。まずこんなものかな、まず明日は、啓太君の監視、守君は、目につく範囲で、対処しましょうね」
「だと今回も……」
「はいスッ、了解スッ！」
十羽里くんは、昨日と違って戸惑いがないよう見える。
「じゃあ、これで、かい……」
「待ってスッ。解散前にいいスッか？」

途中で十羽里くんから遮られる。
「なに、ああ昨日みたいな事があったら、すぐに、ツバキを呼ぶこと」
「いやそれじゃ無いスッ。ハナミ先輩、なんで、狐になろうと思ったスッ？」
日が暮れて来て、部室に日差しが入らなくなった。
「……そう、そろそろ、教えようかしら」
そしてワタシは、中学三年の夏の事を話した。
たぶん、十羽里くんは事件の事と、ワタシがその犯人の娘だということは、知っていたと思う。
でも、あえて全部最初から説明した。
妹がいること。
その妹から、アバウトアニマルの存在を教えてもらった事。
そして今妹がベッドで寝ていることも。
それを十羽里くんは、何も言わずに黙ったこっちを見て話を聞いていた。
「そしてワタシは、狐になった……」
「そんな事があったんスッか」
複雑な顔をしていた。
「あと、なんで狐を選んだか、教える。これ蔵ちゃんも、聞いてないですよね」
「ああそういえばそうだな」
「ワタシの家、稲荷大社系だったのよ。だから、小さい頃、狐が神様だと信じていたのよ。だから、神様になったら楽かなと思って、狐を選んだ。さすがに、中三の頃には、狐が神様じゃ無いというの、はしっていたけどね」
冗談めいた声で言った。別に、深い意味なんてないのだから。
「えースッ。結構適当スッね」
「まあ、とくになりたい動物がいなかったしね。これでいいかな」
「はいスッ」

「あすは8時ぐらいに部室に集合。じゃあ改めて解散！」
みんな同時に部室を出て行く。ワタシが最後にでて、ドアを閉め鍵を掛けているとき。先に出た三人とは別の視線を感じた。
「あっ」
視線を追うと女子生徒がこっちを見ていた。
「どうしたの」
声をかけたら、急に逃げ出した。なんだったんだろう？

ワタシはツバキと十羽里くんと別れて、今も妹が寝ている病院に向かった。
病室に入ると、いつもどおりに妹が寝ていた。ワタシは、妹が寝ているベッドの脇に座り、話しかける。その前にごめんなさいと言う。
医者いわく、意識はあるけど体が動かせない状態らしい。だから、こうして話しかけることも伝わる。
「今日ね。ツバキと喧嘩しちゃった。ワタシがツバキのミスに怒って、怒鳴ったから」
ワタシは妹の頭をなでながら、さらに続ける。
「でもね。後輩の十羽里くんが気付かせてくれたの、とっても簡単なことだったの、相手の立場に立とう。ただそれだけだったのよ。十羽里もね。ミスしたことをすぐに謝ろうと思っていたんだって、なのにね、ワタシたらすぐに怒鳴っちゃって、もう私自身が嫌になっちゃう。あ、花の水替えるね」
ここでワタシは、撫でる手を止めて、立ち上がり花瓶の水を入れ替えに行った。
そろそろ花を替えておかないと。
ワタシは、妹の元に戻り、枯れかけた花を、選び捨てながら続けた。
「ほんと、なんでこんなに人間って、罪深い生き物なんだって思っちゃった。そうそう、ツバキとは仲直りちゃんとしたよ。でもワタ

シは何時も傷付けるばかりで、何もやれない。ほんと、いろいろ許さないとね。あっ、髪型今日も変えようね」
ということで、寝たままの妹の体を起こし、後ろにまわって、髪をいじり始める。
今はポニーテール、今日は何しようかな。三つ編みかな、ここは、ツインテールでも。
まあ、こんな感じに、妹の髪は長い。
倒れたあの日から、必要最低限にしか切っていない。
いや、切れない、と言った方が正確かな。
髪型の事で攻められたくはないな、妹のことだし、たぶん許してくれるでしょう。
「許すといえば、強い人間は何でも、許せるって。ワタシが仕打ちをしたのに、あなたに許されたら、あなたを尊敬できるわ。でもね、もっとすごい人は、全部許した上で、許してはいけないことと、許していいことが分かる人なんだって。もし、あなたに、このことを敢えて、許さなかったら、あなたのことを崇められるわ……」
でも、ワタシがワタシ自身を許さ無い。
許せない、別にワタシが、何でも許せる人間で、許したうえで、許さない事を選んだ訳でもない。
ワタシはそんな強い「人」でもない。
はっきり言えば、そんな「人」にはなれない、せいぜい、すごい化物にしかなれない、いくら頑張っても、いくら罪を償おうと……、いや償えない、何をしたってどうしたって。
今のワタシは、呪いでもなんでもない、ただ自分が犯した罪で苦しんでいる。
いやただの大過、自業自得。
それでも、許せることと、許してはいけないことの区別が付くすごい化物にはなれる。
「はい、できた。昨日はポニーテールだったから、今日は、ツインテールね。明日話三つ編みにでもしましょうか。で、あさっては、

お団子、やなさっては、格子状にでも、でもその日の気分で変えちゃうかもね」
もちろん返事や、相槌はない。
そして、ワタシは、妹をそっとベッドに寝かせる。
「そろそろ時間かな。じゃあね、また明日」
返事が返ってくるもなく、ただ静けさに包まれ、人の些細な動きの音が響く。
病院の外は真っ暗、ほんの一瞬静寂に包まれる。すぐに車のエンジン音が聞こえ出す。
病院を出る瞬間がワタシは一番嫌いで、いつも慣れない。そして帰宅。

ワタシの家は、マンション。
前の家を売り、それを資金に、ここを買った。
３ＬＤＫのマンション、一人暮らしにはちょっと広い。
ペットでも買おうかな、とかこのマンションを買った時に思ったけど、ペット禁止のマンションだった。
「この時得た教訓で何か買う時は、事前に調べてから買うね」
まあ、一人暮らしなので、独り言が多くなる。
「はあ、そう言えば今日は掃除していなかったな、どうしよう」
散らかったリビングを見てあきれる、資料が多いかな。
「昨日パソコンを使っている途中で寝ちゃったからな、仕方がない、今から掃除しましょうか」
だいぶ遅い時間だけど、
「騒音３０パーセントカットの掃除機だから大丈夫！」
十年前ぐらいの、骨董品だけど。というか、変え時の一品。
「まあまず資料を纏めて」

数分後

「掃除機、スイッチオン！」
ぐおおおおおん。
「ば、バイク？　騒音３０パーセントカットは、嘘！」
仕方がないから、爆音を立てながらの掃除。
ピンポーン
とチャイムの音。この爆音の中から、チャイムの音を拾うことができたのは、狐耳のおかげ。
「たぶんこの時間だとご近所さんね。近所付き合いは大切、だからラッキー」
掃除機を止めて、帽子を被り直す。玄関に行きドアを開く。
「今晩は、どうしました……」
隣の自称小説家の、お姉さんがブスっとした顔で立っていた。
「今何時だと思っているの！　掃除機をかけるなら、朝のうちにしなさい」
「すみませんでした。掃除機、古いものを使っていたので」
深々と頭を下げる。いつも、妹に話しかける前みたいに。
「まあ、分かってくれればいいの、それじゃあ」
「あっ、一ついいですか」
踵を返していた、お姉さんに声をかける。
「まあ……いいよ」
こっちを向き直す。
「いじめで、いじめている側のメリット、って、分かります？」
お姉さんは、額に、指先を当てて、はあとため息をつく。
「知るわけ、ないでしょ……人によって違うんじゃない。いじめていることが楽しい奴らもいれば、ウザったくって、消えてもらいてえから、やってるとか、色恋沙汰とかじゃねえ。知らんわ。なに、あんたの学校いじめでも流行っているの？　いやな、世の中になったもんだね～」
色恋沙汰か、もしかしてね。
確かに、守くんは、モテそうかも。

でも、ちょっと違うかな、守りたくなるような儚さを持っているから。女の子の母性本能を燻ぶられて、女の子は、声を掛けずにはいられないかも、それでも、周りからはモテる様に見えるかもだと……。

「もしもし、質問は終わり？　帰って、原稿の続きを書きたいんだけど」

「あっ、ありがとうございます」

「じゃあな。もう二度と、夜に掃除機かけんなよ」

はい、と返事をして、玄関を閉め、鍵を掛ける。

「まあまず掃除は終了、お風呂でも沸かしながら、今晩の食事の準備でもしましょう」

ここでワタシは、帽子を脱ぎ、玄関前のいつものぶしかけに掛ける。

ここにかなり多くの帽子がある。

赤帽、ホテルのポーターとかが、被っている帽子。

他にも、幼い思い出が詰まった紅白帽、ベースボールキャップ、水泳帽、シルクハット、サファリ、これは、冒険家がかぶっているような丸くて全体につばがあるもの。

カンカン帽に、今掛けた、冬用のニット、花笠に、夏のおでかけ用としてよく使う麦わら帽子、夏の学校用でキャップ、秋用に山吹色の漫画家がかぶるようなベレー帽。

で、最近なくしたのが、春用の黄色リボンが巻かれてあって、白色のモンティーベレー。これは、船乗りが被っている帽子みたいな形。

あれ、高かったのに……。

あと最後に、被ると狐がワタシの頭に噛みつくにみたいなデザインの帽子。

と十三種類、正確に言えば、十二種類の帽子がある。

そんなモノローグを語っていたら、お風呂から上がって、もう寝る準備をしていた。

サービスシーンは、ないんだからね！
そろそろこの話は横に置いといて。

就寝。

朝六時、ＰＩＰＩという電子音でワタシは目を覚ました。
あの夏までは、妹に起こしてもらっていたのに……はあ、誰かに起こしてきてもらいたい。
電子音を見気質に出す目覚まし時計を止め起きる。
ワタシは和室の部屋を使っている。
妹が戻っていつでも来てもいいように、部屋を用意している。
前の家から、妹のものはこっちに持ってきていて、妹の部屋にすぐにでも使えるように並べている。
着替えを終わして、食事の準備。
「今日の弁当は、十羽里くんの分も用意しないといけないわよね。たぶん普通でいいかな。好き嫌いとか聞いておけばよかった。まあ、ツバキが嫌いな物を入れなければいいかな」
で作り始める。作っているところを描写すると、料理本一冊できるので飛ばすわ。
三人分の弁当と、ワタシの食事を作り終り。そのあいだ、洗濯物を洗濯機で洗濯をしたり。そして食事と歯磨きをしたりするだけで、いいように身支度を整えた。ちなみにワタシは歯磨きは食後じゃないとダメね。
さすがに昨日の事もあって掃除機はかけなかった。たぶんまた隣のおねえさんに、怒られるだろうし、騒音おばさん、もといい、騒音女高生にはなりたくないもの。
「いただきます」
静かに、食器が擦れる音が響く、食事中はテレビはあまりつけない。
アバウトアニマルが騒がれるようになってから、何時もそのこと

ばっかり、今は新聞も取っていない。
　そういえば、なんで妹は、アバウトアニマルを知っていたのだろう、二年前は、噂レベルの話なしだったのに。あんな明るく、何も悩みがないような、毎日が楽しいという妹がなんでこんなうわさを知っていたのだろう。ただ、友達から聞いただけかな。それとも本気で人間を止めたかったとか、まさか……。そんな憶測を考えながらも朝食が食べ終わる。
　支度を終え、学校に向かう、
「行ってきます」
　毎朝、一人暮らしを始めてから欠かさず言っている挨拶。

　学校までは、自転車で十五分ぐらい。
　とっ、寝惚けながらも、自転車をこいでいるツバキ発見！
「おはよう、ツバキ」
　寝惚けながら、危なっかしく右に左に行っているツバキと並走するように近付く。
「あ、あああ、あ？」
　口を半開きにして、夢か現（うつつ）か分からない状態でいる。
「おーい、起きて！」
「ＺＺＺ」
　寝ている。それになんだかこっちに近づいて来ている様な気が、
「危ない、起きて走行して、ツバキ！」
「うん、あああ」
　ギリギリの所でこっちに近づくのを止め、ツバキが顔を上げた。
「おはようハナミ。ふぁーここどこ？」
　ツバキがこっちを向いたと同時に、身も寄せてきた。
　顔が近い。
「お、おはようツバキ……」
　本当に近い、もうキス寸前というか、影だけ見るとキスしているようにも見えるんじゃないかな。

というか、なんでこんなに近いの、自転車でこの近さとかおかしいよね。
まさに神業。スカートとか巻き込まれてもおかしくないのに、
「今日はふぁー、ほんとにこんな時間でよかったのか」
「大丈夫、すぐには向こうも動けないから」
「サイトとか立ち上げればすぐにでも」
「そこにも手は打ってあるわ。それに、悪い噂を流したところで、そんなに早く話広まらないよ。それこそスーパースターや。モデルのスキャンダルでもないんだし、守君が、学校中が知っている、何かやった子ならまた別だけど」
「まあそうだが」
「というか、本当は、部室まで話すのは禁止なんだけどね」
「ああ、すまん」
学校に到着し、学校の裏の駐輪場に留めに行く。
「あれ、十羽里じゃないか？」
「本当だ。おーい、十羽里くんおはよう！」
自転車小屋で、自転車を止めていた十羽里くんを見つける。
「大声出すなよ。恥ずかしい」
ふん。
「ごめん、でも自重はしてほしい」
十羽里くんがこっちに気が付き、子ぎつねの様なつぶらな瞳で駆け寄ってきた。
「おはようスッ、ハナミ先輩、ツバキ先輩」
「おはよう、もうみんな揃ったわね」
「ここで話すのはまずいだろう」
「まあそうだけど、一ついい方法が思いついたわ」
「何スッかそれは」
「依頼の事でね。あ――でも、よく考えたら実行には移せないね。いうならば、最後の手ね。だけど、この作戦は、あの子を傷つけることになるからお蔵入りね」

ワタシは苦笑しながら歩き出す。
「でも作戦だけは教えてくれ、ハナミ」
切実に、どんな手を使ってでも、やるみたいなオーラが出ていた。
「ツバキ、十羽里くん、この手は本当に最後の手、いや使えないものだと思っていいわ」
「それでもまも……あいつが、少しでもあのつらい状況からどうにか成るなら、頑張るスッ何でもするスッ！」
神への反逆者になるような眼をしていた。
神なら十羽里くんのすぐ隣にいるけど。
「じゃあ言うわ。ワタシ達が、あの子に関わっていることを、あの子が知っている子の前で話す。だとワタシ達の部に、関わっているという、悪いうわさが出る……。一年生だかどうなるかわからないけど」
「アンケートの時言っていた、導き部は雑用みたいな団体だというやつスッね」
「そうよ。まあここまでで、すぐに気付くと思うけど、ワタシ達がしてはいけないことを、することになるの」
「矛盾しているスッね」
「まあそういうものか」
諦めた顔をすると思っていたけどまったく違った。
二人とも希望に満ちていた。
ほんと、うれしいこんなに一生懸命になってくれて。本当に守君のことを救いたい気持ちが伝わってくる。でも、せいぜい差し伸べる事が出来るのは、手だけ。かけられるのは声ぐらい。それを二人は分かっているかは分からないけど、それでもワタシも諦めたくない。
「続き言うわね。その噂を聞いた時の反応で、黒白が付くというもの、あとは、自白させるだけのピースがそろいつつあるから、すべて揃えた所でその子に問い詰めればいいから、瞬く間に解決。後は、噂が消えるまで我慢してもらうつもり、または生徒会長にこの部の

ことをよく言ってもらうかのどっちかね」
「後味すっきりしないスッね」
「そうだな、これもこの作戦ができない理由の一つか？　ハナミ」
「そうよ、人が始めたことは、終わりがはっきりしない、だからこそ、これじゃあだめね。いじめの再発が、そのままだとあり得そうだし」
「そんなうまくいくもんスッかね？　アニメや漫画では無いんスッから」
「確かに、その通りかもしれないけど。それでも、終わりははっきりさせないといけない」
いつの間にか部室の前だった。
中に入り、いつもの定置付く。バックなどは、自分の足元に置く。
「特にここで話すことないんだけど、まあ、昨日も言ったけど、十羽里くんは啓太君の観察をお願い、ワタシとツバキで守君のサポートをするから」
その後、守君たちのクラスの目の前まで行き、昨日みたいには話を掛けずに、ずっと三人を見ていることにした。
結局なにもなかった。
守君は暗い顔を見せなかった。
気持ちを切り替える事が出来たのかもしれない。
「じゃあ、十羽里くんもうすぐホームルームだから行くね。さっきも言ったけど休みになるたびに、メール頂戴。もちろん、導き部全員に、あとパソコンにも」
「分かったスッ」
そこで解散とした。ワタシとツバキはホームルームぎりぎりで教室に入った。
結果から言えば、十羽里くんから来るメールには、収穫がなかった。
黒白が付かない、灰色のまま。

代わりと言っては、なんだか悪い気がするけど、まあ仕方がないわね。
守君が恨まれる理由のピースがそろった。
これで、犯人を特定するためのピースをそろえるだけになってしまった。
少し避けたかった状況になってきた。
昼休み、ワタシ達三人で部室に集まった。
「ちょっと避けたかった状況になった。絶対避けたい状況になってきたと言った方が正しいかもしれない」
「朝のあれができる」
ツバキは、自分で言っておきながら希望と不安の顔に満ちていた。
「弁当どころじゃないスッね」
「ごめんね。おいしい食事にできなくって」
「いいスッ。そういうものだと思って入ったスッから。でも、ハナミ先輩が作ってくれた弁当は何時でも美味しいスッ」
ここで緊張感なくパクパクと食べる音が、部室のドアの方から聞こえてくる。
その人物を、ワタシ達三人のそれぞれの殺気で睨む。
「うん、気にせずに会議を続けたまえ」
「蔵ちゃん、どうしてそんなに、緊張感がないの！」
ここは、攻めるポイントね。突っ込みとかじゃないわ！
「ああ、そんなに睨むな、分かったから、でもお前ら、そんなに切羽詰まっていいアイディア出ないだろう。見た感じから、もう一手で王手なのに、決め手が甘いような状態だろう。ならばなお更だ」
もちろん分かっては、いるつもりだけど。
「アイディアは、あるにはあるんですよ。ただ、これをワタシ達がやっていいものか迷っているんです」
「だったら迷うな、自分のポリシーでも捨てて、やってみろ！」
「でも……」
ワタシはここで言葉に詰まった。

「でも、蔵田先生、それは、ルール違反と同じなんです」
言葉が詰まったワタシの代わりに、ツバキが言ってくれた。
「そう、そこなんスッよ。このジレンマどうしたらいいスッか」
「作戦そのものを知らんからどうも言えんぞ」
「すみませんスッ」
十羽里くんがしょぼんとしたところで、やっとワタシは口を開く、
「作戦はバタフライ効果みたいな話です、風が吹けば桶屋が儲かる、みたいな話です。まずワタシ達と関わりがあることを、守君を知っている子の前で公表します。そうすると、守君が、導き部に関わっているということは、いじめられて相談に行った、でも一年生だからわからないですけど。とにかく啓太君と砥部君がいじめの相談に行ったという噂を聞いた時の反応で、どっちに問い詰めるか決める。そして、自白するほどの証拠決定てきな理由がこっちはあります」
蔵ちゃんは、目を閉じ、再び開けた
「ならば、それをアレンジさせてもらう」
蔵ちゃんから作戦が言い渡された。
……
長い沈黙のうち、ワタシが口を開いた。
「確かにその作戦なら、守君を歪んだ見方をしている、一部の人だけがそんな風にとらえると思いますが……それでも守君には、悪い気がします！」
確かにワタシが考えた作戦より、蔵ちゃんが考えた作戦の方がいいかもしれない。歪んだ意味では伝わらないから尚更。それに、噂みたいに尾ひれがつくこともないし。
「でも、一種の裏切りスッ！」
怒っているのか、不安になっているのか、十羽里くんのその表情はあまりにも複雑すぎて、読み取れなかった。
「ならば、事前にこのことを守に伝えておけばいいだろう」
蔵ちゃんは、なんともないように言う。
本当にワタシ達が、不安になっているとき気楽な考え方ができる

蔵ちゃんは、さすが先生だと思う。いい例を上げてくれる。
「ふぁー、ハナミどうする？　オレも、この作戦が出てきてから、これがベストだと思う。それに、これしかない、これがベストだと思うものが出てきたら、人間、思考しなくなるらしいからな。これ以上考えたって、もうベストだと思う物は出てこないだろう。それに、なるべく早い方がいいだろう」
確かに、ツバキの言うとおり、これ以上いい作戦は出てこない。だも、やっぱり気後れがする。後ろめたさが残る。
「やっぱり、守が傷つかない様にする為に相手が尻尾を出すまで待つスッ」
そう時間を掛ければ、相手も疲弊して……。
「いやだめよ！」
ワタシは叫んだ！
そう，何で忘れていたのだろう、この部の本来の存在意義を忘れてどうするの！
ワタシは何でこの立場に立てた。
そして何がきっかけで、この部を立ち上げたの！
そしてこの部が出来てからも、何が一番の脅威だったの！
ああもう、この部活は誰のためにあるの。
別に守君のためじゃない。
そうじゃない昨日も誓ったじゃない。
この学校を、来年までに良くするって。
先生の、娘さん達が安心してはいって来られる様にするって。
ほんとワタシってバカだった。
答えはこうでしょう！
何のためにこの部があるかって。
一つは、いじめや、人間関係のいざこざを無くす為でしょう。
もう一つは、この学校をよくするためでしょう！
すべての生徒が対象なんでしょう！
そして、最大の意味は、一人でも多く、人間を止めさせない様に

する為でしょう！
アバウトアニマルでの動物化をさせないためでしょう！
この自問自答の沈黙は数分だったのか、たった数秒だったかもしれない。
でも、答えは出た！
「すぐにでもこの作戦を始めましょう。ツバキの待つという作戦はダメね。犯人が、くるって動物化するかもしれないから」
「そうスッね。すっかり、守君の事しか考えていなかったスッ。俺馬鹿スッね！」
苦笑していた。
「大丈夫よ、ワタシもついさっきまで、忘れていたから、ツバキ守君に連絡をお願い。蔵ちゃん例の作戦お願いします」
「ハナミ、でもいいのか。ふぁ～守は浅くても、傷つくぞ」
ツバキが心配そうに見つめてきた。
「その時は、最後の最後まで、サポートに回るなり、逆にこの部に入れるというのもありかな。たぶん、反抗心が芽生えて、動物化はしないと思うわ」
でも、この考えは、あまりにも、安易な考えだったことに後々気付かされる。
「ならいい、やってやろうじゃないか！」
こうして作戦が始まった！

『こちら、蔵田、放送の準備完了』
放送室にいる蔵ちゃんの声が聞こえた。もちろん狐耳を駆使してね。
「こっちいいはいいわよね」
「ああ、守にも連絡済みだ！　十羽里は、中に入って、三人と話してもらっている。でも、十羽里は、本当に守のことが心配なんだな」
ツバキが昼休みの賑やかな教室を眺めながら言う。
「そうね。いじめが何なのか知らない子が、人を心配に思い、大切

にしようと思う。でも人の黒い部分、そんなものを見させてしまったことは残念だわ。あの、きれいに澄んだきつね色の瞳がくすませてしまったわ」
ちょっとした後悔が生まれた。今さら何を後悔したって遅いけど。すでに一歩踏み出しているので前進しかできない。
「それもそうだな、でも誰しも、大人になると、純粋無垢でいることはできないって、蔵田先生が言っていたぞ。オレ的には、化物になるよりはマシだとは思っている」
でも寂しい目をしていた。
「まずは、目の前のことを片付けましょう。蔵ちゃんにメールは打ったわ。あとは……」
ピンーポンーパンポーン
放送前のコールが鳴る、作戦が始まった！
ワタシは、守君ら四人の会話を集中して聴く体制に入る。
「一年九組の星守君、放課後、導き部に来るように。繰り返す、一年九組の星守君、放課後、導き部に来るように、以上で放送を終わる」
ワタシは聞き逃さなかった。あの子が、守君とワタシ達の関係を歪めて伝えたことを。いや、真実を伝えたことを。
「ハナミ、誰だかわかったのか！」
自分でもはっきりと驚いたことが分かる顔をツバキが見て言った。
「そうね。今すぐには無理だから、放課後確実に動けるよ」
予鈴が鳴り、出てきた十羽里くんに犯人のことと放課後の動きを伝えた。
思っていた以上に簡単に事が進んでしまった。
だから油断もしていた。
もっと簡単な注意で回避できたかも知れなかったのに。
でももう遅い。
たぶん、アバウトアニマルが無くっても。
逆に、文明の利器をフルに使っていたら回避できたのに。

一人の少年が、動物化、死を選ぶほども苦しめることがなかったのに。
それは、もう後悔では済まない。
一つの罪とも呼べるかもしれない。

章間参　十羽里

僕はなんもわかんないまま、この導き部に入ったスッ。
いじめや、色恋沙汰、けんかの仲裁などをやるって聞いていたスッ。
何も知らなかったスッ。
何時もやさしい人たちが僕の周りにいてくれたからスッ。
いじめがなんなのか知らなかったスッ。
人を嫌うことも知らないスッ。
俺が、人から嫌われているということもなかったスッ。
たぶん……。
俺は馬鹿スッ。何もできない馬鹿スッ。
でも、人は大切スッ。
ただそれが分かるぐらいスッ。
ハナミ先輩の正体を知った時、初めて人にひどいことを言ったスッ。
「化物！　来るな！　この化け物が！」
確かこの後、ハナミ先輩は、俺を抱き締めてきたスッ。
「大丈夫だよ。何も取って食おうというわけではないんだから」
あまりにやさしい言葉だったスッ。
「あまり、悪口いい慣れていないみたいね。こんなに震えて」
「俺が……俺自身が怖いスッ。こんなに簡単に、人に悪口を言うなんって思ってもいなかったスッ。ごめんなさいスッ。俺はこんなに真っ黒スッ」
ハナミ先輩は、その時首を横に振ったスッ。

「人間だれしもそういう感情がある物よ。十羽里くんは、初めてそういう感情を表に出して、びっくりしているだけなの。だから、その感情とうまく付き合いなさい。そうすれば、人を傷つけないわ」
俺の頭をよくと撫でてくれたスッ。
その時強い風が吹いたスッ。
ハナミ先輩の帽子がなくなったのはその時スッ。
風に流されて、見えなくなるほど飛んでいったスッ。
もう一度言うスッ。
オレは馬鹿スッ、何も知らない子スッ。
だから、この悪い気持ちとうまく付き合うためにこの部に入ったスッ。
絶対守を守るスッ！
はい？　ツバキ先輩の事もスッか！　分かったスッ。
はじめ見たときは、びっくりしたスッ！
逆立ちをしながら、寝ていたスッから。
たぶん、ツバキ先輩には、これからも脅かされ続けるスッね。
とにかく頑張るスッ！

第五章　アバウトアニマルにて

放課後、ワタシの正面に一人の子がいる。
昼休み見つけた犯人、やっぱりこの子だったのか、初めそう思った。
ここ武道場前は昨日よりも、人の気配がしなかった。

少し時間を遡る。
昼休み、犯人が本性を表したのは放送の最中。
周りにいた他の男子に耳打ちをして言っていた。
「守のやつ、いじめられて、それで導き部に行っているって。あいつと係るとろくなことにならないかもな、オレも、そろそろかな」

とそんなことを言っていた。
放課後になりこの子を捕まえた。作戦で守君をツバキたちが探してもらっている。守君とこの子を接触させないために。
「守君のもう一つの大きな隠し事が分かったわ」
そう告げるとその子は、ここではなんですからと言い移動し始めた。
そして今……
「ハナミさんでしたっけ？　守の隠し事、分かったんですか！」
この子はにやにやと笑っていた。口を歪めて。
「そうよ。でもあなたなら知っているでしょ。砥部君」
「分からないから聞いているんです。ふっ」
目も笑っていた。ワタシを下に見る様に、見下すように。
「そお、じゃあまずこの子を知っているわよね」
ワタシは携帯を取り出し、女子生徒の画像を映す。
昨日、部室から出てきたとき逃げて行った子の画像を、
「ああ、同じ中学校から来たやつですよ」
それがなんだと、また見下す目をした。口をなかなか割らないわね。
「あなたこの子のことが好きなんだってね」
砥部は驚愕の顔をした。しかしすぐに落ち着きを取り戻し、
「ええ、そうですが、それがどうしたんすか？　ただの片思いですよ。諦めています。まさか相談に乗ってくれるんですか！」
またにやにやし始めた。笑うのを堪えている様だ。
「だとその口ぶりから、この子が誰を好きだか、知っているわよね」
「よく調べましたね」
ッチ、と舌打ちが聞こえた。
「そうね、大変だったわよ。特に、十羽里くんがかわいそう。そういう成分は、もうお腹いっぱいでしょうね」
「ぐはははは、ケッケッケッ、ハアハハ」
今までため込んだものを吐き出すように、口を横に裂き激しく顔

を歪めて笑った。
「はーあ。守は許せねんだよ！　俺がアイツのことを好きだと分かっているのにっよ！」
その自白を待っていたのよ。レコーダーの意味がなくなるじゃないかと思った。
「そう。この写真の子は守君のことが好きみたいね。守君もうすうす感じているわよ。隣のクラスの子が毎休みごとに守を呼んでいるから」
般若のように、非道憎悪に包まれた顔して、
「あいつは何時も俺が気に入ったものを先に手に入れやがる！　奪いやがる！　ふざけんじゃねえ！　畜生が！　なんで何時も俺ばかりから奪うんだよ！」
たぶん、今回ことだけじゃない。今まで、守君から抜かされてばっかり、その怒りが、憎しみが積もりに積もった。
好きと嫌いは紙一重で変わる。
そして、恋愛でも奪われた、たぶん彼は守に負けない唯一の物だと思っていた。
だから、今までの鬱憤が守君に牙をむけたの？
「でも守君は、砥部君が写真の子のことを好きだと知っていたわ。だから砥部君を紹介しようとしていた。砥部君のいいところ言っていたわよ。かっこいいとか、僕以上に男らしい、とっても友達思いで、優しいとか」
休みに守君を追ったところ、写真の子と会っていた。
ちょっと会話を盗み聞きして、で、すぐにばれてさっきの事を教えてもらった。ついでにその時写真も撮った。
これが最後のピース。自白に追い込むだけの足りなかった最後のピース。
「嘘だ！　そんなことがあるか！　だからこいつを落としに落として、惨めな奴にするなり、クラスや学校の嫌われ者にでもしてやるつもりだったのに！」

またにやけ顔に戻り、
「でも、もう不登校になってもらった方が手っ取り早いな。社会的に死んでもらおう！」
携帯を取り出し、操作し始めた。
するとすぐに、にやけ顔が、驚愕へと変わった。
「なんでだ！　なんであのサイトが消えている！　昨日まであったのに」
「それは、利用規約に違反していたからよ」
「これも、あれも」
「ごめんね。砥部君が作ったサイト、全部消させてもらったわ」
守君から相談があった日に、彼のアドレスで登録してあるサイトを消させてもらった。だから、パソコンの前で寝ちゃったんだけど。
これでもうすぐ王手、チェックメイト。
しかし、沿う問屋は降ろしてくれなかった。
「ふざけんじゃねえ！　守には消えてもらわないといけないんだよ！学年一位も奪いやがった。彼女も奪ったやつよ！」
どさ、と何か崩れ落ちる音が後ろから聞こえた。
「なんで……砥部……」
なんでここに守君が！　ツバキや十羽里くんが付いているはずじゃ、もしかして……
「よう、遅かったな。ようやく来てくれたな。じゃあ消えろ」
パチッ、と指を鳴らすと、昨日みたいに武道場からぞろぞろと人が出てくる。
ワタシは守君を守るように立つ。
ちらっと見た守君の表情は、驚愕、驚き、裏切り、どれとも似つかない。
本当、なんでこんなに詰めが甘かったのだろう、やっぱり守君には言っておくべきだったかもしれない。
「親友と呼べ」、と言っていた人から裏切られた。
それは、ワタシでも味わったことがない、想像を絶する気持ちに

なる。
いや、感情は、残っていないかもしれない。
「そうだ、そのポケットにあるレコーダーを渡してよ、ハナミさん」
今度はワタシが驚く番になった。
レコーダーは大きいからばれても仕方がない。
「間違えました、犯罪者の娘さん、そして、狐の化け物！」
これは驚きだった、別に犯罪者の娘というところに驚いたわけではない。誰だってちょっと調べればわかることだから。
驚いたのは、ワタシが狐であることを知っていることだった！
「うわ、すごいね。そのトップシークレット情報どっから手に入れたの？」
厄介なことになったわね。守君を探しに早く来てツバキ、トバリくん！
「部室に入れてくれて、ありがとうございます。その時、いろいろ付けさせて頂きました。狐さん。いや化物が？」
化物ね。そうにしか見えないわよね、普通。
「いや失敗失敗、もうちょっと部室に入れる人を厳選しようかしら？　いや、もう一個、防音設備が整った教室でも、もらいましょうか。ほんと、部室だと思って安心していたのに。気を付けなきゃ」
ワタシは狐耳を隠す白色のニットに手を掛ける。
そして、何も抵抗を感じずにニットを外す。
「耳、狐……」
恐怖で染まった顔を見た。人間はみんなそう、怖がる。
「守君これが本当のワタシだから、動物と人間のはざまの生き物」
「はは、化物が、はあはは」
高笑いを続ける。
砥部は勝ち誇った顔をして、
「これがばれたら退学なんだってな。これをばらされたくなかったらよ」
と近づいていてくる。

「お痛ぐらいいいよな」
さらにワタシ達の周りを囲むように、ほかの子もやってきた。
中には昨日ブッ飛ばされたはずの多田達もいた。
「いやああ」
もう、フルパワーでもいい、から。
ワタシは、襲ってきた子を突き飛ばす。
どん、と人が壁にぶつかる音が聞こえた。
次々ときて、もうどうしようもなかった。
数が多すぎるのよ。
「おいおい、ハナミさんよ。ばらされてもいいのかい？」
砥部が、不適な笑みを浮かべて言った。
「リーダー、こいつ尻尾もありますぜ」
そういったのは、多田君だった。昨日とは打って変わって、下手に出ていた。
そしてついに、ワタシは押し倒され。
守君は、殴られ始め。
されるがままの状態だった。
なんでいつもこう詰めが甘いのかな。
「助けて」
もちろん毎回都合よくツバキがやってきてくれるわけないか。
最後の抵抗として。全力でワタシを取り押さえている子を吹き飛ばす。
制服は乱れ、スカートからは尻尾が覗いていた。
しかしまた押し倒される。
だめなのかな、と思った時。
「ハナミ先輩と守に何しているスッか！」
叫び声とともに、十羽里くんが、ワタシを押さえつけようとしていた子に、タックルをかましていた。
「ハナミ先輩大丈夫スッか、あっ守！」
守君の周りにいた男子にまたタックルをする。

ぶつかり、周りにいた子が尻餅をつくように倒れる。
「守こっちスッ」
十羽里くんは守君をひっぱりこっちに来る。
「痛いじゃねえか！」
守君が最初に倒した、多田が立ち上がる。
そして何人か復活して、また私たちを囲む。
「ふん、ハナミさんチェックメイト！」
万事休す、もう、手が残っていない。
「いや、まだスッ！」
十羽里くんが目の前の子にタックルをする。
「下種が、何度も同じことが通用するか」
顔面を蹴られ、倒れる。
砥部君が十羽里くんの髪の毛を掴み持ち上げ、
「十羽里とかい言っていたな。お前からいたぶるか」
と顔面を地面に叩き付けられる。
何度も何度も、
「いやあああ」
ワタシは狐の力も全力で使い。砥部君を叩き飛ばす。
「痛えな！　ふざけんじゃねえ。お前は黙って待っていればいいんだよ」
ワタシは、ボロボロになって、立ち膝をついていた十羽里くんに覆いかぶさる。
「先輩どいてください」
立ち上がろうとする十羽里くんをワタシは押さえつけ。
「もういいの、あなたが傷付かなくても、もういいの」
それでも、十羽里くんは立ち上がろうとし、
「でもここで立たないとダメなんでスッ！　まだまだこれからスッ」
「そうだまだだぞ、十羽里！」
「ツバキ！　遅いよ！」
やっと来てくれた。

「よかったスッ」
十羽里くんは両膝を突き倒れる。
「ハナミをよく守ってくれたな、十羽里」
そういうツバキは、階段の踊り場に立っていた。後光で、姿が見づらいけど。
「すまない。ヒーローは後からやってくるじゃないんだが、蔵田先生を引っ張り出すのに手間取ってしまって」
蔵ちゃんが、のこのことツバキの隣に立つ。
「ヒーローは遅れてやってくる！」
決めポーズをしている。
蔵ちゃんが痛いよ、中二病だよ。
「蔵田先生、突っ込むのは諦めていいですか」
「打ち合わせしたじゃないか！」
「はーあ」
面倒くさそうにため息をつくツバキ。
「なんで突っ込まないのだ、ツバキ。先生突っ込みをいれてくれないと、いやだ、いやだ」
一瞬で、シリアス感がなくなる。
「ダダをこねんじゃねえ！　それでも教師か！」
「最高の突っ込みが出た所で止めるか」
「そうですね蔵田先生」
もう、みんなポカーンとしている。
うん、締りが悪いわ、締りが悪いわ。
大事なことなので、二回言いました。
「はっ、なんだその三文芝居は、老いぼれ教師と、くそ男子生徒一人で何ができる」
あーあー、蔵ちゃんにそんなことを言ったら。
「ド畜生が！　この若造が舐めんじゃねえぞ！」
蔵ちゃんが、一跳びで階段の踊り場からこっちに降りてきた。というか、飛んできた。

「まあまあ、落ち着いて蔵田先生……」
とツバキが普通に階段を下りて蔵ちゃんの隣に立ち、立ち上がったワタシを見た。
ブッチ
何か聞こえてはいけないような音が、ツバキからしたんだけど。
正確に言えば、ツバキからしてはいけない音がしたわよね？
「ハナミに何をしやがった！　それ以上手を出したたら。お前ら殺す！」
視線だけで人が殺せる領域に達していた。
あの時のワタシとは違って、赤いオーラで、人を飲み込むようなものだった。
「へえ、じゃあ」
砥部がワタシの胸を触ってきた。
「！」
瞬く間に、砥部に近づき、ツバキが砥部を殴りに殴っていた。
一番痛い、殴り飛ばさない、ダメージを、相手の体に馳駆する、最凶最悪のパンチ。
「死ね！」
もう、早すぎて手が止まって見える。そのうえ砥部君の腹部だけが不自然に凹み続ける。
「がはあ」
砥部が吐いたところで止める。
「ツバキ、流石にやりすぎ」
潮目を向いて、倒れた砥部は、気を失いながらも、嘔吐を繰り返していた。
「ああ」
少し落ち着きを取り戻し、深呼吸を繰り返す。
「でも、こっちには数がいるんだ。昨日とは違う」
と多田の声と共に、武道場からこの学校以外のヤンキーが出てきた。

「軽く五十はいるスッね」
何時の間にか、ワタシの後ろで、守君に覆いかぶさる体制だった十羽里くんが、守君を離しこっちを向いていた。
「軽く警察沙汰よ！　面倒くさいわね」
「ああそうだな、ハナミ。でどうする」
ツバキが、腕をグルングルンして聞いてきた。
「ツバさん、蔵さん、やっちゃいなさい。」
「水戸黄門！」
ツバキがワタシの方を振り返り突っ込んだ！
「まあ冗談は横に置いといて、本当に大丈夫この数？」
数えたら、六十三人もいた。
「大丈夫だ。蔵田先生が二十三人。オレが四十人ということで」
二三歩前にいた蔵ちゃんにツバキが並ぶ。
「おいおい、もっと大丈夫だぞ。半分にしないか？」
「体力の事も考えて、フラフラな姿を、娘さん達には見せられないですよね？」
「はは、気が利くな。じゃあ、時間が余ったら手伝うぞ」
「ええ、手伝わせてくださいね」
ふふ、と蔵ちゃんが苦笑し、歩き出す
「「うおおおお」」
とざっと五人が一斉に襲ってきた。
ふと、蔵ちゃんがしゃがむ。
襲ってきた子たちは、みんな立った時の蔵ちゃんの顔面に合わせて、上から下に向けて殴ったので、しゃがんだ蔵ちゃんによって足がすくわれみんな一斉に転ぶ。
しかも顔面から落ちて、一回転して仰向けに伸びる。
パイプで殴ってきた子には、昨日のツバキと同じように、パイプを掴み取り引き落とし、飛び蹴りをやる子には、するりとかわし、後ろから手刀で首に当てて気絶させていた。
一方ツバキはというと。

「あの女さわり心地が良かったよな。ハアハア」
という声が聞こえたと同時に、
「バーサーカー発動」
と低い声でいい、ヤンキー集団の中をただ歩く、と同時に
「ぐあああ」
とヤンキーたちから断末魔らしき声が聞こえてくる 。
ただツバキが通り過ぎていくだけで、悲鳴が上がり、手を振れば周囲の人間が膝から崩れ落ちる。
神というより、悪魔か、邪神ね。
そして、ツバキと蔵ちゃんがバッタバッタと水戸黄門みたいにヤンキーを倒し、最後の一人。
「多田君だったかな？」
と蔵ちゃんがニコニコと近付き、
「へえい」
多田君はへっぴり腰になり、壁にもたれながら、ぺたんと尻餅をつく。
声は震え、この世の終わりという顔をしていた。
「今日も、お前が最後か、じゃあ眠れ」
「せーの」
二人が拳を振りかざし、爆音とともに、多田君の後ろの壁に大きな亀裂が入る。と同時に土煙が立ち込めて、多田君の様子が分からなくなった。
「ツバキ、蔵ちゃん。その手」
血だらけになった手で戻ってきた
まさか、多田君は……、
「ハナミ、無理にシリアス演出いらないから」
「あはは、ばれた？」
多田君の顔近くの壁左右に、拳で作った小さいクーレタが出来ていた。ところどころ赤かった。
「ハナミ先輩が、すごく怖い顔をしていたので、つい二人が殺(や)って

しまったかと思ったスッ」
十羽里くんがワタシに並びながら言いう。
「あいつはもう立てんよ。失禁している。男としては一生の恥だな」
みんな、死体同様、ぴくぴくしながら倒れている。
見るからに気色悪かった。
「まあ、今回は警察沙汰になるから覚悟しておけ！」
蔵ちゃんが苦虫を噛み潰して飲んでしまったぐらいの顔で、倒れている子を眺める。
「まあまず。これで守くんの、依頼任務完了！」
ワタシは満足感に浸り、笑顔でそう告げた。
「おう」
ツバキもまた笑顔で言った。
「よかったスッ、守……えっ」
十羽里くんが声を掛けようと、後ろを振り向くもそこにいるはずの人物がいなかった。
だれもいなかった。
「守君！」
ワタシも周囲を見渡すもの、どこにもいない。
まさか巻き込まれたなんってことは無いし、じゃあどこに。
「武道館のなかにもいない」
武道館を見にいったツバキ後そう告げた。
みんなの顔から、笑みはなくなり、真剣な顔になる。
まずいまずすぎる。このタイミングでいなくなったことが。
さっきまで、虚ろだったから……
「まさか守君……」
ワタシはとたんに走り出した。
早く見つけなきゃ……間に合って。
「ハナミ、待て。そんな恰好で、探しに行くつもりか！」
階段の踊り場に差し掛かったとき、ツバキに手首を掴まれて止められた。

「何やっているの、早く守君を見つけなきゃ、じゃないと守君は」
「まあまず落ち着け」
おおいに取り乱していたワタシに、急にツバキがワタシの頭に手を置いた。
「もしかしてこれ」
「プレゼントだ」
ワタシの頭には帽子が被されていた。全体が桜色で、狐色のリボンが付いたモンティーベレーだった。
「昨日の事で、けじめをつけたくって」
「ありがとう。でもなんで今」
「ハナミ、今の自分の姿をよく見ろ」
「へっ」
よく見ると、さっきまで帽子をかぶるのを忘れているわ、セーラーの首元のボタンや、横のチャックが開いていてシャツが見えているわ。
しかも、しっぽでスカートがまくれ上がっているし、それはもう大変な姿をしていた。
はずかしい、なんでこんなことにも気が付かなかったの。
でも確かに、こんな自分の状態も解っていないで、守君を探しに行っていたら、たぶん見つけられなかったかも。
ワタシは服装を正し、
「音でまず探してみる」
「そうそう、落ち着いてきたな」
ワタシは、目を閉じ、かぶせてもらったモンティーベレーを両手で取りそのまま持つ。
周囲の聞こえる声、足音を一つ一つ探していく。
少しずつ範囲を広げていく、ゆっくりと正確に。
なおかつ、聞こえてきた音を素早く、守君の足音や声と照らし合わせていく。
「あったけど、何階か分らない」

「どういうことだ、ハナミ」
「声は聞こえてこなかったけど、似たような足音が同じ位置の別々の階で、鳴っているの」
「よしわかった、何階と何階だ！」
さすがにツバキも慌てている。
「一階と三階、それに屋上。ツバキは一階の３の２、十羽里くんは、三階の１の２にワタシは屋上。とまず見つけたらすぐに声をかけて、それで、自殺か動物化をしていたら全力で止める事！」
「分かっている」
「俺も絶対、守を助けるスッ！」
「じゃあ、すぐに移動」
「「おう（スッ）！」」
ワタシより先に、二人が走り出す。
ワタシはさっきもらったばかりの、きれいなモンティーベレーをしっかりと被る。
自然と力が湧いてくるような気がした。
そして、今まで明かさなかった狐の力を使うことにした。
一〇〇メートル一〇秒ダッシュ。
そう、そのぐらい切羽詰まっているということ、てが打てるうちに早く。
そしてワタシは、靴底をえぐるような勢いで走り出した
瞬く間に、いや、刹那に、目の前に屋上へと続く扉が現れた。
そして勢いよく開けた！
虚ろの目の少年が、顔だけをこっち向けて飛び降り防止のフェンスの上に足を外に見向けて座っていた。
「守君！」
ワタシは駆け寄るが、
「来ないでください！」
フェンスを両手で掴み叫んだ。
ワタシは、あと数歩で手が届くのにという、歯がゆい位置で、立

ち止まった。
「ハナミ先輩、狐なんですよね」
こっちも見ずにただ独り言のような声で、つぶやいた。
「そうよ。正確には、一回人を止めて狐になっている途中でまた人間に戻ろうとした、半分狐で、半分人間」
「ならば僕は鷹になろう……はあはははは」
もう支離滅裂だった。守君は空を見上げ、高笑いをする。
「人間を止めるなんって、ずっと罪を感じながら生きるだけよ！」
「はは何を言っているのですか、人間なんってもんはただ面倒くさいだけでしょう。親友と呼べと言っていたやつに盛大に裏切られたのですよ。どうしろっていうんですか、だれを信じろって言うんですか！」
ガシャンと激しく足をフェンスにぶつける、フェンスが大きく揺れた。
「それでも、人間だからできる事がいっぱいあるじゃない！　ワタシ達高校生にしか、楽しめないことがあるじゃない！　なの、なんでそんなに簡単に、人間を止めようとするの！」
ワタシも激しく後悔した。
ほんの一瞬、気の迷いだったかもしれない。だからこそ！
「そんな、一回人間を止めた人に言われても、説得力あるわけないじゃないですか」
「そうかもしれない、でもだからこそ言えることだってある」
「そうですか、動物になるときは痛いんですか」
別にどっちでもいい、そんな投げやりな言葉だった
「そうね、本当痛いわよ」
「そうですか、腹をくくりましょう、これで心の準備もばっちりです」
「待って本当にいいの！」
ついに携帯を取り出し、操作し始めた。
「何もここまで来たら、痛いのなんて我慢ですよ」

「じゃあなんで、鷹なの？」
彼が携帯の操作を止め、また両手をフェンスに手を掛ける。
「だって、自由じゃないですか、鳥って。その中で一番強いのは鷹。自由を求めるんですよ。どこのも誰にも縛られない、友達なんっていらない、何(なん)にも何(なに)もいらない、全部いらない」
ワタシもそうだった。動物になろうと、決意をした時も、
「動物になったら、不安になっても、だれも支えてくれない」
ワタシは、妹に支えてもらったことを思い出しながら言い、
「面白いことが有っても、その面白味を共感できない」
ツバキたちとのたわいもない会話を思いながら言い、
「知りたいことがあっても誰も教えてくれない」
ワタシ達が、作戦がうまく組めなかった時、蔵ちゃんの年の功からくる、違う発想を提案してくれたことを思い出しながら言い、
「つまらないことが有っても、愚痴を言うこともできない」
病院で、妹にツバキとケンカしたことを愚痴のように言ったのを思い出しながら言い、
「みんなで同じテーブルで食事もできない」
今日の昼、少しだけど、みんなで楽しく食事をしたことを思い出しながら言い、
「恋もできないわよ。だってさ、人間じゃないんだから」
一陣の風が吹く。
ワタシと、守君の髪が大きく後ろになびく。
「ワタシは今言ったことを本物、として体験できないの。あくまでも仮初め。そう全部偽物。嘘と偽りの経験、ただただ本を読んだり、アニメを見たりして、体験したように思うのと一緒。一回狐になって、戻って、半分しか戻らなくって、そんな中途半端な、偽物の人間で、偽物の狐のワタシ。だけどね」
一歩ずつ、歩み寄りながら、
「守くんはね、まだ戻れるの、まだ人間であり続ける事が出来るの！　まだ過ちは犯していないの、だから」

ワタシは守君がこっちを向いて、手を延ばしたら届く距離まで、手を指し延ばす。
「でも、そんな事ができる仲間がいなかったらできないですよね。たとえ、人間だろうが、ツバキ先輩みたいな、神だろうが、ハナミ先輩みたいな、半分人間、半分狐だろうが、僕は、親友に裏切られたのですよ」
愛情が歪めば、すぐに、憎しみ悲しみになる。さっきの似たようなことが言ったけど。
ほんとなんでこの子たちは、気持ちがすれ違うのだろう。
同じ方向を向いていた気持ちが、
「そうね。砥部君、消えてほしいと言っていたわね」
ワタシは指し延ばしていた手を引く
「そうですよ。あいつは最初から僕の事を嫌いだったんですよ、ええそうですよ。あいつとの、過ごして初めて築いた、友情も、楽しかったことも、うれしかったことも。ええ全部、偽物、いいえ、存在しなかったことなんですよ。もともと、そこにそんなのがなかったのに、まるであるように錯覚して、そう思い込んで、だからもう人間なんて嫌なんだ！」
守君は、空を見上げ、すべてを吐き出すように言った。
「そうね。ワタシも人間大嫌いよ」
「へっ」
「そう全部嫌い、ええそうね。まず、化物だといった子はいやだね」
「さっき言っていたことは嘘なんですか！　また……裏切られた……」
今度は、下を見下ろすかのように頭を前に倒す。
「あら、ワタシの事を信じてくれていたの、だったらなぜ人間を止めようとしたの！　ワタシ達は、最初のこう言ったよね。本当につらくなったらワタシ達導き部を頼って、暴力を振るわれたら、導き部に逃げ込んできていいから。本当につらい今なんでワタシ達を頼らないの、ワタシの言葉に耳を傾けてくれたのに、なんで、ワタシ

達を頼らないの、それこそ裏切りなんだよ！」
　わたしは、何かを断ち切るように、右手を大きく一回横に振った。
「ああ、もう面倒くさい。人間関係なんってもんがあるからいけないんだ！　人間なんて、生きていようが、死んでいようが、何にも変わらない！　それに、人間なんて、一人死のうが、世界全体やや宇宙全体から見ても、なんともない事なんだ！」
「そんなこと言ったら、周りの心配してくれる子はどうなるの！　そこにもいるわよ。あなたが死んだら悲しむ子が」
　あの写真の女の子が、屋上の扉を開き出てきた。
「まもちゃん……なにをやっているの！」
　写真の女の子が叫び駆け寄ってくる。
「なにって、見てわからない？　もう人間を卒業しようとしているんだよ」
「いや……、まもちゃんが死ぬなんって嫌！」
　写真の子が、フェンスに近づこうとしたけど、
「だめよ。今これ以上行ったら。何を仕出かすか分からないから」
「何を仕出かすか？　死ぬか、動物のどちらかになるだけですよ。どうせ、先輩の今の気持ちも、あの子の今言ったことも、嘘偽りなんでしょうから。冷めますよ、人の愛情も、友情も同情さえもそうですよ」
「そんなことは無い、私はあなたの事が好きなの！」
　写真の子がいきなりの告白をした。
　びっくりしたけど、とても優しい口調だった。
「その気持ちもいつかは、冷めて、偽りとなるんですよ」
　写真の女の子には言わず、ワタシに向かって言っていた。
「そうかもね。でも、あの子があなたを好きだったことは、本当よ。たとえ気持ちが冷めても、種火は残る。火に水をかけて、鎮火させても、ほんのりあったかい。気持ちもそうよ。たとえ、水を掛けられた様に、恋心が冷めても、深いところにはまだ残っているの！　その子には、あなたが好きだったということが本物の過去として残

っていくものなの！」
写真の女の子の前では失礼なことだったかもしれない。
「でも、ついた火には、燃料を継ぎ足さないといけないですよね。燃料がなくなったら、どこにも種火は残りませんよ」
だいぶ冷静になって来たのか、守君は落ち着いて言うようになった。
「そんなの、燃料なんってものは、心よ」
「その心さえなかったら。どうするんです」
「そんなの、いつの間にかできているものよ！」
そういい、ワタシはまた一歩近づく。
もう、フェンスの真下だった。
「まあいいです。もう何もかも遅いですから」
すると守君は携帯を持ち上げ、決定ボタンを押した。
画面に映っていたのは、あのファンシーな、まるでそこが楽園だと言い張るような、サイト。
そうアバウトアニマル！
「なにをやっているの！」
ワタシはフェンスに一歩で飛び乗り。守君の携帯に手を伸ばす。
「うわあああ
ああ

「とどいて、もう少しなんだから」
守君が持つ携帯に手を伸ばす。
守君を包む光の中では、まるで泥に手を突っ込んだように、前に進まない。
「あとちょっと……」
「いやああ！」
写真の女の子が叫んだ。
守君の背中から、羽根がワイシャツや、ブレザーを押しのけて、生えてきた！
やばい、早くしないと、もう戻れなくなる！
「とっと」
一回手をすり抜け失敗。
「もう一回……とった」
ワタシは守君の携帯をすぐに握り潰す。
守君を包んでいた閃光とスパークが消える。
握り潰した手からは、涙のしずくのように、一滴、血が落ちる。
と同時に、フェンスが傾く、しかも、外に向けて。
「守君！」
そしてあの危険を知らせるあの赤色に守君がそまった。まだ意識はなくそのまま前倒しに落ちる。
「きゃあああー」
写真の女の子が再び叫ぶ。
とっさに、必死に手を伸ばし、……。
ギイイと、嫌な音がしフェンスが外側にほぼ横倒しになる。
ワタシは、その横倒しになったフェンスに乗っていた！
左手には、ギリギリのところで守君の手首を持っている。
「よかった」
携帯を離し、フェンスに手を掛ける。でも、携帯を握り潰した、右手はもう力が入らない。
今は、守君を落とさない様にするだけで必死だった。

「う、ううう」
守君が、気が付く。
背中には、羽根はついていなかった。
「離してください！　もう僕は、死にたいんです！」
手を振り切ろうと暴れだす。
「そんな……のは……嘘よ……くっ、守君は……死ぬつもりだったら……何時でも……っく……飛び降りることができたでしょう！」
次第に、守君の手がワタシから次第にずれていく。
もう持たないかな。
「まもちゃん、そんな事こと言わないで！」
写真の子が、ほぼ、横倒しのフェンスの上に上がり、ワタシの横についた。
またフェンスが大きく傾く。
保ってよ。絶対助けるんだから。
「じゃあ……僕は何をすればいいんですか？　何を信じればいいんですか！」
泣いていた。ひどく後悔した顔で。
「だったら。あの子の手を取って、生きなさい。そして、ワタシ達を信じなさい！　あなたの味方でいるから！　彼女も」
そして、写真の女の子がフェンスに腹ばいになり、守君に手を指し延ばした。
守君は、ワタシの手を握り、差し伸ばされた手に手を伸ばす。
「最後に教えてください！」
さっきまで泣きじゃくっていた守君が、真剣な、決意を表す顔をした。
「僕はまだ人間ですか？」
ワタシは、一番優しい、笑みを浮かべ。
「ええ、あなたは誰がどう言ったって、正真正銘の人間よ！」
「僕は死体にはなりたくないだから僕の手を握って」
そして、守君は、写真の女の子の手を握る。

ぱん
「じゃあ、引き上げるわよ」
「「はい」」
守君が小柄でよかったと思った。
大柄だったら、ワタシがフルパワーを使えても、この女の子と二人で引き上げることができなかったと思う。
そっと引き揚げフェンスの上に守君を上げる。
またギイイと嫌な音をフェンスが発てたが、傾くこともなかった。
「よかった」
ほっと安堵につく。
「まもちゃん」
フェンスの真ん中にいる守君に写真の子が抱き着く。
夕日が茜色にこの子たちを照らしていた。
ふと、風が吹く。
女の子ならだれでも憧れを抱く、とても絵になる瞬間だった。
ハッピーエンドだね。
そう確信し、ワタシは立ち上がった……、再び一瞬にして二人が赤く見えた。あの危険を知らせるあれが。
ギイイガシャン、この子たちの祝福しない音が聞こえた。
「危ない！」
ワタシが、二人を校舎側に突き飛ばす。
と同時に、フェンスが今までになく大きく傾きだす。
さらに大きな音を立て、フェンスが壊れた。
そのままワタシはフェンスと共に後ろに落ちていく。
重力に引っ張られ、下へ下へと行く、
「ハナミ先輩！」
「いやあああああ」
守君が手を伸ばしていた。
でも、もう遅いわよ。
でも、よかった。守君を守れて、だからそんな悲劇めいた顔しな

いの。
ほんとこういうのは慣れないわね、去年もあったわね、たしか。
その時は、絶対下が安全だと分かっていたから、よかったけど。
本当は一瞬の出来事だったかもしれない。
ツバキから貰った、モンティーベレーがふわりと上がる。
その時は夕日が、朝日のように上がり、ピンクのモンティーベレーは朝日に照らされながら、空へと舞い上がる桜ように見えた。
風が髪の間をぬけ、夕日に照らされながら、落ちていく。
たぶん、下には茂みや、クッションになる物がないだろうし、フェンスも一緒に落ちているから無理ね。
死ぬのかしら、たぶん、このまま死んだら、ワタシを人体実験とか、解剖して調べるんだよね。
やっぱり、人間は嫌いね。別に好きになって死ぬ必要もないわね。
死んでもいいけど、妹の事が心配ね。
「ごめんね。そして、バイバイ」
ワタシは、屋上から泣きながらワタシを見ていた二人に手を振る。
そして、目をつぶる。
「お前が死んでどうなる！　フェンス邪魔だ！　消えやがれ！」
「ツバキ！」
ぼすっと、温かくしっかりとした腕に収まった。
目を開けると、夕日のせいで影を作ったツバキの顔があった。
そしてゆっくりと、モンティーベレーが落ちてくるのが見えた。
「ばか野郎！　お前が死んでどうなる！　お前が死んだら、オレはどうしたらいいんだよ！」
「はは、ごめんね」
とても体がだるくって、言葉に力が入らなかった。
ぴたぴたとツバキの顔からしずくが落ちてきた。影のせいでツバキがどんな表情をしているか解らなかったけど。
「オレが……神様じゃなかったらどうしていたんだよ！　それにもし、お前が死んだら、世界を作り変えるぞ！」

「世界を作り変えるって、あの小説の女の子じゃないんだから、でもただのヒーローだったらワタシは助からなかったかな」
「そうだな。瞬間移動も使ったんだからな」
「それはウソでしょ。ちょうどツバキが行ったクラスの真下だったんだから」
「はは、ばれたか、だったら守を落としてもよかったのに」
「ばか、そんな事が出来るわけがないでしょう！」
「すまん。冗談が過ぎた。落としても、守のためにはならないだろう」
「分かっていたなら許しましょう」
ツバキが、ゆっくりと落ちてきたモンティーベレーを、ワタシを抱えながら、桜の花びらを拾うようにそっと拾う。
「落し物だ。もう無くすな、落とすなよ」
「ええ……ありがとうワタシだけのヒーロー」
そして、ワタシはお姫様抱っこをされながら、ツバキと見つめ会う。ツバキの首に腕を回して、お互いに顔を近づける。
ちゅ……涙の味がした。
「マウストゥーマウススッ！」
と……十羽里くんに見られた……かく……。
「は、ハナミ！　おい、は……」
ワタシの意識はここで途切れた。

エピローグ

起きた時には、保健室のベッドの中にいた。
ツバキが、寝ながらも右手を握っていた。まさかずっと握ってくれていたのかな。傷の手当てもしてあるし。
では、寝ているツバキに、おはようのチューをおでこにでも、
「何やっているんスッ」
もう少しで、でこチューだったのに。十羽里くんの邪魔が入った。

「あはは、十羽里くんいたんだ」
「ひどいスッ！　もう少し周りにも目を向けてほしいスッ！」
「うん……うう」
「あっ、ツバキが起きちゃったじゃない！」
「別にいいじゃないスッか」
と急にむくっとツバキが起き上がる。
「ああ、ハナミだ。抱き着く」
「きゃ」
押し倒されて、抱きつかれちゃった、てへ。
「大胆スッ。こんな俺がいる前でスッ！」
「もう、寝惚けて可愛いわね。仕方がないわね。いい子、いい子」
「頭を撫でて、あやしはじめたスッ！　それに、ハナミ先輩がさっきより余裕スッ！　あっ、でも俺もいい子いい子、されたいスッ」
「……ＺＺＺ」
はーあと二つの溜息。
「突っ込みがいないと、ボケがボケとして成立しないわね」
「そうスッね」
寂しそうに、物足りないような、欠片がそろわないような、とにかく、何か足りない顔をしながらツ十羽里くんは言った。
「起こしましょうか」
「どんな感じにスッか？　ツンデレスッか？」
「いや、ヤンデレ風に」
「どうなるスッか？」
「ねね、早く起きてよ。ねえ……でも、起きてこなければずっとワタシの物の、ま・ま・よ」
「ぎゃーああスッ！」
「う……うん……ん」
十羽里くんの大げさな叫び声でツバキが起きちゃったじゃない。
「うん、おはようツバキ」
「ううん、おはようハナミ。って、なんでハナミに抱き着いている

の！」
　すぐに、ツバキがワタシから離れる。ちょっとさびしい。
「ツバキから、抱き着いてきたんだからね！」
「はい、反省しています。すみません」
「別に、何時だっていいのに」
「なんか言ったか？　ハナミ！」
「いや、別に！」
　もうちゃんと聞きなさいよ！
「で、どうなったのかな」
「守は、今頃彼女といちゃラブだろう。多田や砥部は警察でお世話になっている。ことがことだけに、仕方がないとかという話だ」
「そう、守君がいちゃラブなのは嘘だと思うけど、警察は本当ね」
「ああ、うちの生徒だけにでも、学校で校正プログラムを組んでいるから、それを受けさせるって。それを今、蔵田先生は警察と相談中だ。さっき顔出しした時には、ぐったりしていたな」
「悪いことしちゃったね」
「そういえばスッ。あのフェンスはどこにいったスッ？」
「さあ？」
「ツバキが、分子レベルで分解したとかじゃないの？」
「いや、何事もなかったかのように、もとの位置にあったんだ」
「ある意味最大のミステリーね」
「まあいいじゃねえか、そんなこと」
「そうね、じゃあ、これにて今回の任務終了！」
「よっしゃ！」
「え……このテンション何スッか」
　十羽里くんの目が危ない人を見る目になっていた。
「いつもこう大きな任務が終わると、こんなテンションで打ち上げをやるの」
「は、はあスッ」
「で、十羽里くんどうだった、はじめて任務を終えての感想とか」

「そうスッね。怖かったスッ。でも、人の考え方が分かったスッ。人は黒いスッ！」
そう感想を言う、十羽里くんの目は、狐色からくすみ、焦げ茶色だった。
「辛くはない？」
「大丈夫スッ！」
「さて、たぶんまた警察とかに、お話しないといけないと思うけど、今日は打ち上げよ！　そうだ一回部室行ってくるから」
「はいスッ」
「本調子じゃないんだから、ゆっくりいけ、昇降口で待っているからな」

ワタシは部室に入ると、中に人がいた。
「守君に彼女も！　どうしたの？」
「「謝りたいんです」」
ああ、そうか、すっかり忘れていたわね。
「アフターケアーもお任せの、導き部、わかった仲裁役をやりましょう」
二人は手を握って喜び合った。
打ち上げは延期ね。
ワタシは携帯を取り出しながらそんなことを思った。
「もしもしツバキ……」

次日の放課後

ワタシは砥部君の家の前にいた。
今日、ワタシ達も、結局警察に絞られた。
たぶん、そんなことに、なるんじゃないかとは、思っていたけど、

丸一日つぶれたのは、ちょっと嫌だったわ。
で、目も前には守君と守君の彼女、それに砥部君が向かい合うような形で立っていた。
「なんのようだ」
砥部君は冷たく言い放ち踵を返した。
「ごめんなさい！」
守君は、砥部君に向かって深々と頭を下げた。
「なに、いまさら、謝っても遅い。お前のせいで、俺は監視が付く毎日を、これから送っていくんだぞ」
「私からも、ごめんなさい」
二人とも、それ以上何も言わずに、深々と頭を下げたまま止まった。
「だから、遅いんだろ」
「僕、砥部が彼女の事が好きだったって知っていた。だから、彼女に砥部のいいところいっぱい教えたんだ」
「でも、私は、あなたの事が、恋人としての意味では好きになれなかった。でもそんなすごい友達、砥部君には興味があったし、お友達になりたかった」
「僕も砥部と同じで前々から、彼女の事が気になっていた。そして、砥部が彼女の事が好きだということを僕に言ったとき、初めて気付いたんだ。もしかしたら、僕はその気持ちに気が付かないまま、過ごしていたかもしれない。だから、ありがとう。僕の親友」
「だったら何しろと言うんだ！」
「僕も、ハナミ先輩に同じことを聞いた。たぶん、今も同じ答えを出すでしょう」
ワタシは、一回だけ頷いた。
そして心の中でつぶやく、
「手を取って。まずそれから生きなさい」
まったく一緒のタイミングで守君が言った。
「だったら今までの嫉妬も全部返せ！」

おかしなことを言うと思った、その砥部君の顔は、憎き相手を蹴散らすかをでもなければ、憎悪の塊でもない。
とてもすがすがしい、さわやかな顔だった。
「いや、お前に嫉妬させてやる。ライバル」
「ああ望むところだ、砥部」
「ええ、私に嫉妬させてあげます」
ああ、のりがいい子ね。
「ライバルと書いて、友と呼ぶ、彼女と書いてライバルと呼ぶ関係ね」
「君とそんな関係嫌だよ」
守君が突っ込む。
ここで、ワタシが三人の前に立つ。
「これでいいかしら」
「「「はい」」」
三人は笑い、ワタシは去った。
「お疲れ」
曲がり角を曲がると、すぐにツバキが声をかけてきた。
「やっぱり慣れないわね」
すごく泣きたい気分になった。別に、理由なんってものはない。
「そうだな。親の元を離れる子供を見る時の心境と、全く同じかもな」
モンティーベレー越しに、ワタシの頭を撫でる。
「うん、そうかもね」
ちょっと傷心的な気分の放課後だった。

「さあ、残っていた予定を立てるわよ」
「ふぁー面倒」
「そうスッね？」
次の日の放課後ツバキはいつもながらだらっと長机に、突っ伏し

ていて、十羽里くんは、さらにお茶入れに力を入れるとかで、今はドア近くのお茶セットとにらめっこをしていながらも会議にはいていた。
「ああもう、二人ともちゃんと座って聞いて、これから話すことは、あなたたちの人生の一生に関わってくることなんだから」
「そんなすげえ会議だったのこれ！」
「マジスッか！　すごいスッ」
「ええそうよ、これから会う事件が一生のトラウマになるかもしれないから」
「おい、トラウマ級の何をやらせようとしていんだ！」
「まあ、それは後々……」
こんこんとドアがノックされる音がする。
十羽里くんがドアを開け、二人の少年を招き入れる。
「あの、相談したいことが……」
今年も去年と同じにやるかな。面白くって、忙しい毎日を。
そんないいか悪いか分からないような、一年を過ごすのよ。
この三人、ワタシとツバキと十羽里くんで。
「おい俺も忘れるな」
そう蔵ちゃんも……。
「って、また何時の間にいるんだよ！」
と何時もの様にツバキが突っ込む。
「魔法の一つや二つ出来なくって何が教師だ」
「そんな教師、世界中探してもあんたぐらいだ！」
「まあまあ、落ち着いて二人とも、そういうことは横に置いて置かないと、だめじゃない。依頼人がぽかーんとしているわよ」
「そうスッよ。置いてきぼりはひどいスッ」
前言撤回、この四人なら、今年も楽しくやれそう。
そんなことを思った、十六歳のちょっと暑い春。

おわり

見た悪とその回答集。（後書き）

続きを書くかはまだ未定です。
とにかく読んでくださった方ありがとう。
いろいろ感想お待ちしています。ではまたいつか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1179z/

FAQ（狐の問題とその回答集）

2011年12月5日09時50分発行